

2021 年度 地域連携センタープロジェクト事業

成果報告書

灯籠文化圏比較研究

～「眠流し」行事と「山・鉾・屋台」行事から～

2022 年 3 月

青森公立大学 経営経済学部

地域みらい学科 佐々木研究室 編集

巻頭言

本報告書は 2021 年度の地域連携センタープロジェクト事業「灯籠文化圏に関する研究」の事業報告書である。2020 年度は比較調査研究として、徳島の阿波踊りと青森のねぶた祭の住民参加について調査を行う予定であったが、新型コロナ・ウイルス感染症の流行のため事業自体が中止となった。すでに関係者との連絡をとっていたため、いずれまたしっかりと事業を行いたいと考えている。

前年度の調査中止を踏まえて、2021 年度はできるだけ近隣県、もしくは県内調査を行うことを念頭に事業計画をたてた。しかしながらやはり当初計画通りとはいかず、何度も計画を変更し、今回の報告書にしるした場所への調査となった。できるだけ公共交通機関を使わず、自家用車・公用車で移動を行い、感染対策を万全に整えて調査に赴いた。祭礼の調査であるため、本来であれば実際の祭を見学したり、その関係者から直接話を伺いたかった。しかしながらなかなかそういった調査はできずに、主に施設をめぐり資料を収集することとなった。学生には人からの伝承を含めた、聞き取り調査の機会を提供したかったが、それが設定できず大変残念であった。

しかしながら、直接現地に赴き、資料館や伝承館を巡ることで、これまで知りえなかったことを肌で感じることもできた。場所によっては実際の祭に登場する山車が展示されており、そのスケールや技巧は目を見張るものがあった。こういった経験を通じて、将来的にこれらの祭に直接触れ合う機会ができることを心から願うばかりである。

さて本報告書の内容を少し紹介しておく。第一部は佐々木が近年の調査から学んだことをまとめた。特に祭礼を「メディア」として捉える視点を提供している。様々な祭を訪問し、当該社会における祭礼の役割や機能を分析していくうちに、同時に祭礼によって社会が成立しているという視点が重要だと感じ始めた。このことはまた「青森ねぶた祭」に関する論考を執筆することを通じて、詳細に明らかにしていきたい。第二部は調査の概要である。主に、調査地で収集した資料やインターネット情報からまとめたものである。これは 2021 年 12 月の第 6 回公開講座にてゼミ生が報告した内容を文章化したものである。文章にするとやや平板ではあるものの、公開講座のプレゼンテーションは非常によくできたものであった事を記しておく。調査に行くこともハードルが高かったと思うが、実際よくゼミ生は動いてくれたと感じている。また報告準備に関しても、教員が何も言わなくとも自らが積極的に相談しまとめていた。そして報告は現代の学生らしく、画像・映像を駆使したものとなっており、改めて関心させられた。彼らの努力を称えたい。

第三部は昨年度、青森公立大学佐々木研究室が主体となって行った「クラウド・ファンディング ねぶた師を救え」のプロジェクト紹介である。このプロジェクトは内藤亘氏（事務局）、後藤公司氏（アドバザー）、佐々木てる（代表）が立ち上げたプロジェクトである。このプロジェクトの経緯を 2020 年度の公開講座シンポジウムで報告した。その時の資料を載せてある。またプロジェクトに関して、支援者から多くのメッセージを頂いた。これは主催

者へのメッセージであると同時に、ねぶた制作者である「ねぶた師」、そして「青森ねぶた祭」そのものへのメッセージである。その一部を掲載しておいた。当時の多くの人の想いが伝わってくる貴重な資料だといえる。いずれクラウド・ファンディングのきっかけを含め、その経緯を紹介する本を出版したいと考えている。

ここ2年間、祭礼としての「青森ねぶた祭」が中止になり、本当に残念であり、また寂しい期間を送っている。本来であれば調査も、実際の祭に参加することによってその内容を肌で感じることはできるはずである。制作者の気持ち、参加者の熱、そして祭そのものの力を直接感じることで、理論と実践が融合するはずである。今後学生自身が自分でまとめたことが目の前で展開される機会に出会えることを切に願う。

新型コロナの影響はあったものの、訪問先の資料館、博物館等では、担当の方が真摯に対応してくださった。この場を借りて心より感謝したい。ありがとうございました。

最後に昨年度から祭を実施できず、ずっと我慢しているねぶた師をはじめとする多くの祭関係者と共に、未来を信じて一緒に努力を続けていきたいと考えている。伝統を守る闘いは決して楽なものではなく、時には改革が必要になるときもある。さまざまな苦難を乗り越えて、「青森ねぶた祭」が途絶えることなく、ずっと実施されることを信じつつ本報告書を上程したい。

2021年3月

青森公立大学 経営経済学部
地域みらい学科 教授 佐々木てる

目次

第一部 総論

研究ノート：メディアとしての「ねぶた」

～灯籠文化圏と山・鉾・屋台文化の祭礼比較の視点から～

佐々木てる 1

第二部 調査報告

0	灯籠文化圏調査：青森編	樽井寧々 亀岡紗衣	17
1	灯籠文化圏調査：秋田編	七海香穂 小田麗華 川口華流	22
2	灯籠文化圏調査：秋田・山形編	工藤恵 前川美穂香	28
3	灯籠文化圏調査：岩手・秋田編	佐藤乃愛 久保遥 金澤零治	33
4	灯籠文化圏調査まとめ：青森ねぶた祭を中心に	秋元健大 佐々木世奈 神なぎさ	37
5	灯籠文化圏調査：北海道・岩見沢編	中谷帝虎 平田昂至	43

第三部 2020 年度 クラウド・ファンディング関連資料

・2020 年度 公開講座「クラウド・ファンディングを振り返る」	47
・クラウド・ファンディング支援者コメント	56

第一部 総論

メディアとしての「ねぶた」

～灯籠文化圏と山・鉾・屋台文化の祭礼比較の視点から～

佐々木てる

はじめに：本稿の視点

本稿の目的は、「青森ねぶた祭」が民俗行事である「眠流し」「七夕祭」と、京都の祇園祭発祥の（都市型の）祭礼を源流とすることを前提とし（小松 2016：9）¹、現代においては逆にこれらの祭礼が互いに影響しあっていることを明らかにすることを目的としている。その際、「七夕行事として行われる灯籠流しを中心とした祭礼を行う地域の総称」²をここでは灯籠文化圏とし、祇園祭の影響を強く受けていると思われる祭礼を「山・鉾・屋台」行事群としておく。またこれらの双方向的な影響の考察から、祭礼とは「メディア（媒介であると同時に、メッセージを創造するもの）」（McLuhan1964＝1987）であると主張することにする。特に祭礼に使用される「灯籠」「山・鉾・屋台」という具体的な「モノ」（＝祭礼を司るための象徴的な舞台装置）自体が「メディア」としての役割を持つことを主張していく。

さて本調査研究は、2021 年度の青森学術文化振興財団助成金事業、青森公立大学地域連携センター事業として行われたものである。当初の研究目的としては以下のように提示した。

青森県の祭礼は大きく分けて 2 つの源流を持つと考えられる。一つは太平洋側からの山車文化、もう一つが日本海側からの灯籠文化である。これらの二つが融合しているのが、青森の祭文化の特徴といえる。しかしながら、こういった視点から県内の祭を分析したものは皆無に等しく、文化・伝統に関する学術的な記述が少ない。唯一『青森ねぶた誌』に若干の記述がある程度である。そのため今回は東北の灯籠文化圏を調査し、青森県の祭の源流を明らかにすることが目的となっている。

今回の事業は中国大陸から伝わり、富山、新潟、秋田に伝わった祭礼における灯籠文化を調査することにより、青森県の祭の源流を探り、学術的に提示することにある。これによって、青森県の祭が日本の中でも、太平洋側、日本海側の文化を融合させた、文化・伝統の面でも高度な文化的構築物であることを述べていくものである。この点を強調することで、全国さらには全世界へ青森県の文化をアピールす

¹ 小松はねぶた祭りの起源には「村落行事源流説」と「都市祭礼源流説」の二つの方向があることを指摘する。前者が「七夕祭」「ねぶた流し」といった寺社と結びつきのない民俗行事であり、後者が「祇園御霊会（祇園祭）」を代表とする「都市・町場の祭」である。本稿では現在の人形灯籠や運行される山車などの存在を鑑みて、その両方の源流が混ざっているものとして「青森ねぶた祭」を考えることとする。

² 七夕行事という民俗行事であるため、多くは中心となる寺社が存在しないこと、そして旧暦の 7 月 7 日、すなわち現在の 8 月 7 日になんらかかたちで「灯籠流し」が行われ、祭礼が終了するという共通点を持つことは前提とする。

ることができ、これまで以上に注目を集めることができるであろう。そのためにまずは、灯籠文化が日本海側の各地でどのような変化をとげ、そしてどのような形で青森県に伝わってきたかを分析していくことにする。さらには京都祇園祭を発祥とする、山車文化との融合について考察していくことを目的としている。

上記のような当初目的は現在も変化していなが、簡単に日本海側が灯籠文化であり、太平洋側が山車文化と単純にわけることができないのはいうまでもない。後に指摘するように、ねぶたをはじめ、多くの灯籠文化圏の祭礼行事では、山車が登場し、それは明らかに山・鉦・屋台文化の影響を受けている。そもそも「ねぶた」の起源の一つとして、当時の津軽藩主、津軽為信の時世に京都の文化を受け入れ、山車（大燈籠）が登場したのがきっかけであるという説もある（小松 2016 : 76）。もちろん日本海側が中心になって灯籠文化圏が構築されているということも、間違った説ではないだろう。例えば中牧（1979）は「日本海沿岸の風流（ふりゅう）燈籠」として、その文化が北陸道や日本海を経由して津軽に伝わったことを指摘する。この点はまた後述するがここで重要なことは、東北（もしくは日本）の祭と呼ばれているものの多くは、祇園祭、送り盆行事、七夕、眠流し、さらには虫送りといった行事に起源をもつものが多いこと。そして、それらは「厄除けや、祓い、清めといった宗教的観念」が共通（中牧 1979 : 85）しており、大きくは「灯籠」と「山・鉦・屋台」という 2 種類の「モノ」（＝祭礼を司るための象徴的な舞台装置）が登場しているという点である。

再度述べれば、「青森ねぶた祭」における山車である「ねぶた」本体は、民俗行事（七夕祭、眠流し）に使われた灯籠と京都祇園祭系の山車と深く関連していることがわかる。そしてさらに本稿ではこの「モノ」＝（灯籠・山・鉦・屋台／青森では「ねぶた」）こそが、中心的役割を持ったメディアであり、全国に祭礼が伝搬、そして模倣されるのに重要な役割を持ったことを結論として述べていくことにする。

2 調査概要

2.1 灯籠文化圏調査訪問先一覧

本論に入る前に、今回の調査の概要を述べておく。下記の訪問先の詳細およびターゲットとした祭礼、祭、行事に関しては第 2 部でまとめてあるので、そちらを参照してほしい。まず訪問先と日時は下記の通りである。

訪問先一覧

2021 年 6 月 25 日～27 日 秋田調査（第 2 部、1）

- 6 月 25 日 秋田県鹿角市「鹿角観光ふるさと館あんたらあ 祭り展示館（道の駅かづの）」
- 6 月 26 日 秋田県能代市 「能代ねぶ流し館」
- 6 月 27 日 秋田県秋田市 「ねぶり流し館」「秋田県立博物館」

2021 年 8 月 8 日～11 日 秋田・山形調査（第 2 部、2）

- 8 月 8 日 秋田県鹿角市 「仙北市観光情報センター」
- 8 月 9 日 山形県酒田市 「酒田市立資料館」
- 8 月 10 日 秋田県秋田市 「ねぶり流し館」
- 8 月 11 日 秋田県秋田市土崎 「土崎みなと歴史伝承館」

2021 年 8 月 14 日～16 日 秋田・岩手調査（第 2 部、3）

- 8 月 14 日 秋田県花巻市 「花巻市立図書館」
- 8 月 15 日 秋田県横手市 「横手かまくら館」 岩手県盛岡市 「盛岡市山車資料館」
岩手県盛岡市 「もりおか歴史文化館」
- 8 月 16 日 岩手県 「早池峰神社」

2021 年 11 月 19 日～21 日 北海道岩見沢調査：岩見沢ねぶた調査（第 2 部、5）

- 11 月 20 日 北海道岩見沢市 北海道教育大学岩見沢校訪問
- 11 月 21 日 市内 北海道教育大学岩見沢校 芸術 展示会

2021 年 12 月 5 日～6 日 青森の「山・鉾・山車」と灯籠（第 2 部、0）

- 12 月 5 日 野辺地町「まかど観光ホテル訪問」 八戸市「ユートリー」「八戸市美術館」
- 12 月 6 日 黒石市「松の湯交流館」「津軽伝承工芸館」弘前市「津軽藩ねぶた村」

本来であれば、実際の祭礼の様子をみたかったのだが、新型コロナ・ウイルス感染症蔓延のため資料収集に徹することとなった。また資料館などはなくとも、市内、町内に祭礼で使用する山車やその技法を使った「モノ」が展示されているケースがある。これは「青森ねぶた祭」で使用される「ねぶた」と同様の印象を受けた。すなわち地域にとっての文化資源は同時に観光資源、そして商品化されうるということである。各地域の特徴、もしくは特徴を出す戦略として捉えることができる。同時にそれは、各地においてほとんど祭礼に関する資料館や、展示施設が存在することにもつながる。いずれにせよ地元の祭礼は民俗行事として、各地域と密接に関連し、そしてそれが文化・伝統として継承されていることがわかる。また最後に訪問した北海道、岩見沢の「ねぶた」は「祭礼」というよりは「市民まつり」³であるが、それが一つの地域の特徴を創り出す可能性を持つという点で、非常に興味深い。

なお多くの場合、各施設において担当の研究員の方が在中しており、それらの方々から参

³ 「市民まつり」に関しては千葉大学の倉阪研究会 都市・交通分科会（2013）の「祭で地域のつながりは再生できるか」を参照した。ここでは祭りを大きく二つに大別し「伝統的祭り」と「市民祭り」としている。前者は、「神社仏閣をその中心とし、宗教性や伝統に基づいた、祭礼や奉納、年中行事、またはそれらが元となっているものを指す」とし、後者は「行政や企業、あるいは町内会や自治会、商店街など地域住民がともに企画運営する、地域の活性化や観光 PRなどを目的とした祭り、およびイベントである」と定義している（7頁）

考となる話を伺った。聞き取り調査というスタイルではないため、個別に名前は紹介しないが、本報告書全体において非常に参考にさせて頂いていることをここに記しておく⁴。

2.2 祭の共通性と開催される時期の違い

さて今回の調査で対象とした祭礼を分類すると表 1 のようになるだろう。まず起源であるが、多くは江戸中期から継続されて行われていることがわかる。これらの多くの祭には、「戦時中もがんばって開催した」「戦後復興も含め皆で継承してきた」「中止になった時もあったが継承してきた」といった地元の語りが必ずといっていいほど存在する。これらの語りは非常に興味深い、また別の機会に紹介したい。表 1 を見ると、その起源、開始されたおよそその年代がわかる。ただし、それぞれの起源は現存する史料で最初に記述された、もっとも古い文献を根拠にしているため、そのほとんどが「おおよそ」の年代でしかない。場合によってはもっと古い時代から行われていた可能性もある。

また灯籠の自体の大きさは、江戸後期にかけて大きくなっていき、どこも高さを競うようになっていく。それが、電線が張られ、高さが、規制されるようになってくるといふ共通の語りを持つ。この点も祭礼の発展という意味で一般化できる傾向で非常に興味深い。そこに富を集中させることが一つのステイタスになるという、人々の共通の意識があるといえる。

訪問した際には、近年全国的にはなじみが薄くなってしまったが、柳田の指摘した「眠流し（ねぶ流し、ねぶり流し）」といった言葉は今も残っていることが印象的であった。第 2 部の 4 で述べているが、「眠流し」行事は「七夕祭」よりは、「精霊流し」の行事に近いものであろう。しかしながら「精霊流し」はたいてい盆に行われること（送り盆行事）、また船を流すことなど「眠流し」行事とやや意味や形態を異にするだろう。共通点としては眠気＝睡魔といった魔（悪いもの）を流す、健勝を願うといった夏の行事としての意味合いを持つ。その意味では流すという行為は、「精霊流し」「灯籠流し」と共通する。その他、盆前に行われるという点は、祖先が帰ってくる前に場を清めるという意味での「迎え盆行事」や、豊作を願うという意味での「七夕祭」に近いものといえる。いずれにせよ、この時期に集中して行われる行事として分類することができるだろう。

その他、今回の灯籠文化圏と比較しつつ「山・鉾・山車」行事群をみていくが、これらは主に祇園祭系であり、その特徴は起点となる寺社が存在することである。これらの行事はいわゆる「例祭」（寺社などで由緒ある日、特別な日に行われる祭祀）であり、寺社の歴史によって開催される日に影響を及ぼしている。この意味でも民俗行事とはやはり別に考えた方がよいと思われる。

その他注意点として灯籠文化圏行事はその名の通り「灯籠」が出るのだが、その多くは「山車」の形態をとっていることである。山車文化は「山・鉾・屋台」行事から伝承されてい

⁴ 特に秋田県の「秋田県立博物館」、「土崎みなと歴史伝承館」、「横手かまくら館」山形県の「酒田市立資料館」、岩手県盛岡市の「山車資料館」の担当の方からは非常に参考になるお話を頂いた。また北海道岩見沢では実際に聞き取り調査を行った。この点は第 2 部 5 で扱っているのでそちらを参照してほしい。

表1 調査先の祭礼の分類表 (網掛けは七夕/眠流し行事)						
月	日	名称	場所	形態	意味	起点
5月	19～21日	酒田まつり (山王祭)	山形県酒田市	山車	例祭	日枝神社
	1～31日	京都祇園祭の山鉦行事 (祇園祭)	京都府京都市	山・鉦	例祭：災いを収める	八坂神社
7月	20, 21日	土崎神明社祭の曳山行事 (土崎港曳山まつり)	秋田県秋田市	曳山	例祭：厄を払い、人々の無病息災を願う	土崎神明社
	7月30日～8月5日	黒石ねぶたま祭り	青森県黒石市	灯籠 (山車)	七夕行事	1700年代～
8月	1～7日	青森ねぶた祭	青森県青森市	灯籠 (山車)	七夕行事	1700年代～
	1～7日	弘前ねぶたま祭り	青森県弘前市	灯籠 (山車)	七夕行事	1700年代～
	3～6日	秋田竿燈祭	秋田県秋田市	灯籠 (提灯)	七夕行事	1700年代～
	4～8日	五所川原立佞武多祭	青森県五所川原市	灯籠 (山車)	七夕行事	1800年代～ (1996年復活～)
	5～7日	七夕絵灯籠祭	秋田県湯沢市	灯籠	七夕行事	1702年～
	6, 7日	能代役七夕 (ねぶながし)	秋田県能代市	灯籠 (山車)	七夕行事	1700年代～
	1～3日	八戸三社大祭の山車行事 (八戸三社大祭)	青森県八戸町	山車	まちの安泰や豊作を祈願 例祭	おがみ神社・新羅神社・神明宮 1700年代～
9月	14～16日	大迫あんどん祭	岩手県花巻市	山車	供養・盆行事	1800年代～
	15, 16日	横手送り盆まつり (6日ねぶり流し)	秋田県横手市	屋形船	供養・盆行事	1700年代～
	18, 19日	花輪ばやし	秋田県鹿角市	山車	例祭	1204年～ (鎌倉時代)
	18～20日	田名部まつり	青森県むつ市	山車	例祭	1700年代～
	8月中旬に4日間	野辺地祇園祭	青森県野辺地町	山車	例祭	1700年代～
	14～16日	盛岡八幡宮祭りの山車行事	岩手県盛岡市	山車	例祭	1709年～
	7～9日	角館祭りのやま行事 (角館のお祭り)	秋田県仙北市	山	例祭	1600年代後半～

と考えられる。また現在「精霊流し」の形態をとるのは、今回の調査では秋田県の横手市くらいであった。多くの行事は華やかに「山車」を曳きまわすことが中心になっていることは注目に値する。ここでも祭礼の道具である「モノ」を見ることが、文化の融合を考える上で重要であることがわかる。

3. 「灯籠文化圏」と「山・鉦・屋台」文化

ここでは、冒頭に述べた「灯籠文化圏」と「山・鉦・屋台」行事群について、先行研究を参照しながら説明しておく。

3.1 灯籠文化圏

日本海側に灯籠の祭りが分布していることは、先にのべた中牧だけでなく、小松 (2016)⁵や阿南 (2019)⁶も指摘している。阿南は 2018 年に行われた青森公立大学公開講座にて、日本海側に分布する灯籠について整理したものを報告した。そこでは富山、新潟、秋田、青森といった地域に分布していることが示されていた。以下阿南の報告と、レジュメを参考に日本海側の灯籠祭りについて紹介しておく。

富山で有名なのは夜高行燈（よたかあんどん）であり、山車の形をした行燈（灯籠）である。特に富山県の砺波（となみ）平野に分布しており。南砺市福野、砺波市出町、砺波市庄川、小矢部市津沢の四カ所が有名だという。夜高行燈の由来は、福野は、伊勢神宮から神を迎える際に出迎えたという、福野神明社の開基伝承に由来する。他は田植え後の休み日「田祭り」の行事である。形態の特徴として阿南が指摘するのは、夜高行燈が 4 つの行燈、1 つの傘鉦を組み合わせて作るもので、前後につけた棒（練棒または台棒と呼ぶ）を押して動かすことである。また骨組みに竹を使い、色彩は赤、ピンクが多い。そしてロウで線を書き、墨はあまり使わないという。さらに祭りの最後に行燈を壊すという。この点は「青森ねぶた祭」の人形灯籠である「ねぶた」の制作技法や、その後の解体と通じるものがある。

また阿南の指摘として、祭礼として興味深いのは、福野ではすれ違う際、行燈を壊し合う、引き合いが行われることである。また砺波、津沢は相手と正面衝突させ、庄川も正面衝突だが水平方向に押し合うとされている。これは今回調査した秋田県横手市の舟の「ぶつけあい」や、秋田県角館の山行事にみられる「やまぶつけ」にもみられる。一説によれば「ぶつけあい」（喧嘩）に勝った方の土地がその年より豊作になるという点から行われてき、その後単なる争いになったため中止の方向に進んだという。おそらく全国の祭でみられるこうしたぶつかり合いはその名残と思われる。

⁵ 小松は「列島の中の青森ねぶた ねぶたの仲間たちをたずねて」『青森ねぶた誌』(19-25) で他県（越中・能登半島・越後・東北地方）の灯籠文化についてまとめている。阿南はこれを踏まえた上でまとめているので、今回は阿南の報告をもとにまとめた。

⁶ 2018 年 11 月 1 日、青森大学公開講座「日本・世界に広がるねぶた」の報告内容、レジュメを参考にしている。これは佐々木 2019『2018 年度 地域連携センタープロジェクト事業成果報告書 「青森ねぶた祭」を作る人々』佐々木研究室：59-68 に収録してある。その他は阿南 (2014) 参照。

このほか富山県には魚津の「たてもん」、滑川市の「ねぶた流し」(松明に点火し海に流す)、石川県には(縦長の行燈)「キリコ」を神輿のように担ぐといった行事がある。このほか、新潟には青森の「金魚ねぶた」に似た「鯛車」が、新潟市巻などに残っている。秋田に関して報告されたのは、今回の調査でも扱っている、能代市の「能代ねぶながし(役七夕)」横手市の「ねむり流し」、秋田市の「竿燈」である。このように、青森で行われる、ねぶた・ねぶたと同様に灯籠文化圏を構成する祭礼だといえるだろう。本研究の出発点も、この灯籠文化の共通性を考えることから出発している。

ちなみにこの灯籠文化圏は、津軽海峡を越えて北海道にまで伝搬している。北海道では三大行燈祭りとして、「沼田町夜高あんどん祭り」「しれとこ斜里ねぶた」「八雲山車行列」がある。沼田町のあんどんは形態が富山県砺波のものと類似している。しれとこの斜里ねぶたは、その名の通り弘前系の扇ねぶたが登場する。八雲の山車行列は、人形灯籠のねぶたも登場する。このように今後さらに伝搬し、模倣されていく可能性があるといえる。

3.2 眠流し考

さて、小松や阿南、中牧がまとめる以前、彼らが参照している文献として、やはり柳田国男『年中行事覚書』における「眠流し考」を再度確認しておく必要があるだろう。灯籠文化圏が主に日本海側であることは間違いないと思われるが、「眠流し」行事自体は全国的なものであったことが、この論稿から伺える。「眠流し考」で取り上げられている行事を書き出すと下記のようなになる。

関東

- ・埼玉県羽生町：ネボケ流し
- ・埼玉県熊谷地方：ネム流し
- ・栃木県足利：ネプト流し
- ・宇都宮：ネムタ流し
- ・鹿沼：ネムッタ流し

九州

- ・熊本県阿蘇神社：眠流祭(ねむりながしまつり)

中国地方

- ・備中の阿哲郡(岡山県)：ナヌカベ(七日浴び)

中部地方

- ・信州：オネンブリ
- ・上田(長野県)：眠流し
- ・長野七夕祭：ネンブリ流し
- ・南安曇郡(長野県)：ネムリ洗い
- ・北三の河段嶺村(愛知県)：ネブチ流し

日本海側の北寄りの地方

- ・越中滑川(石川県)：ネムタ流し
- ・越後柏崎(新潟県)：七夕流し

- ・新潟 元住吉神社：湊祭（ヨタナバタ→海へ送る飾り物の名、マトイ燈籠）
- ・山形県鶴岡市：ネブリ流し
- ・秋田県横手町：ネブリ流し ・大曲：ネムリ流し ・秋田市：竿燈
- ・能代：湊の眠流し ・鹿角郡 南部の宮川村：ネムリ流し
- ・鹿角郡 毛馬内：ネンプタ

（同じ仙北郡でも二つの土地で、ネムリ流しとネプタ流しともいっている）

奥州路

- ・白河：ネムッタ流し ・会津耶麻郡：ネムタ流し ・対馬久根村：ネブノキ流し

青森県各地

- ・ネプタ流し

こうしていくと日本海沿岸のみならず、関東そして九州にまで分布していることがわかる。「眠流し行事」は基本的に「眠気＝睡魔」を流し、健康をもたらす年中行事である。柳田は「ネプタは合歓木（ねむのき）と睡魔とを意味し、マメはまた豆と壮健を意味していた」と指摘する。そして「その一方を憎んで海川に」流す行事が「眠流し」行事である。その時に流されたものが、「合歓木」であった。またこの起源をさらにたどれば、一種の御霊会（ごりょうえ）としての説もある。すなわち「盆を正月同様の悦ばしい祝いの日とするために、前もって無縁の気味の悪い霊だけを、なだめすかして立ち退かせ」ておくのである。そのため、行事として精霊流し、燈籠流しの行事もその起源にあたるといえる。

このように、「青森ねぶた祭」の祭礼としての起源をたどれば、日本の伝統的な祭礼、年中行事にその起源を見てとることができるであろう。ただし青森に関していえば、「この程度の燈籠ならば、秋田にもまた新潟にもあった。その上に人形はまた別にこの日を以て海に送り流す習俗があったらしいのだから、これを燈籠の風流すなわち飾り物に、技巧が許すならば利用しようとする。動機が初めから潜んでいたもので、ただこの地方の如く発展して来た事実だけが特異なのである」と述べている。すなわち、行事としての類似性は青森以外にもあったが、その技巧が発展していったのが青森だといえるだろう。だとすると疑問はなぜ、青森ではその技巧が発展していったのか、そしてその技術はどのように伝搬されてきたのかが、問いとして浮上することになるだろう。この点は次の課題として残しておくことにする。

3.3 「山・鉾・屋台」行事

青森市の「青森ねぶた祭」における人形灯籠、もしくは弘前市の「ねぶた祭」における扇灯籠のどちらにしても、「見せるため」の風流、技巧が凝らされ、他の祭と同様の大型化という経緯もあって現在のサイズにおさまっている。しかしその制作の技法は非常に進化し

ている。第一部の4のまとめでも指摘されているが、その技法はすでに芸術と呼べるにふさわしいものとなっている。この詳細に関してはさらに調査が必要となってくるが、その技巧の源流をたどるには、やはり民間行事の「眠流し」だけを分析しても答えはでないであろう。そこで、京都祇園祭を起源とする例祭に出される「山車」という文化を考えていくことにする。

3.3.1 祇園祭とは

まずは前提となる「祇園祭」について少し確認しておく。祇園祭に関しては2019年度の調査の「比較祭礼研究」の調査であつかった。その際のまとめを中心に紹介しておく⁷。

京都の祇園祭は毎年7月1日～31日に行われる、日本の代表的な祭礼であることは周知のことである。起点は八坂神社であり、四条通を山車が巡行することでも知られている。ただし青森ねぶた祭のような、跳ねるといったいわゆる「盛り上がる」行事というよりは、「厳か」に巡行するという、まさしく「神事」として詣でる運行といえる。むしろ盛り上がるのは、3台の神輿がでる時であろう。

祭は期間によって前後にわかれており、7月17日の「前祭山鉾巡行」、7月24日の「後祭山鉾巡行」で市内巡行が行われる。前と後では別の「山」「鉾」と言われる山車が組み上げられ、街なかに「展示」される。一般に「山」と「鉾」は「動く美術館」といわれるほどの技巧を凝らした飾り付けがなされている。前祭(7月14日～16日)には23基の山鉾が登場し、後祭(7月21日～23日)には10基の山鉾が登場する。先にのべた3つの神輿は17日の「神幸祭」、24日の「還幸祭」で巡行する。

「山、鉾」の運行は「神輿」に乗った神様を喜ばせるためのものであり、露払い的な役割をもっていたようである。それが都市型の祭礼になっていくに従い、富や権力の象徴として豪華絢爛に装飾され、現在のようなかたちに変化といわれている。祇園祭の起源はもともと平安時代(869年)に飢饉に見舞われ、さらに全国で疫病がはやり、その原因とされていた怨霊を鎮めるための儀式としてはじまったのがきっかけである。その時66本の矛を立て、牛頭天王(スサノオノミコト)を祀って3基の神輿を神泉苑に送り怨霊退散の儀式をおこなった。66本の由来は、当時の日本の国の数で1国につき1本だったためといわれている。当初は「祇園御霊会」といわれていた。

この祇園祭の山鉾は、日本各地の祭礼に影響を与え、それぞれの例祭の際に模されたものが登場することとなる。そしてこれが重要無形民俗文化財として指定されるに至り、2016年にユネスコ無形文化遺産保護条約「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に登録されている。近年では、こうした山鉾やさらに山車を出す行事として、「山・鉾・屋台行事」と呼ばれている。

⁷ 祇園祭に関しては佐々木研究室編2020『祭礼の比較研究～青森ねぶた祭・祇園祭・田名部祭りを中心に～』でまとめたものを引用している。

表2 ユネスコに登録された「山・鉾・屋台行事」

4月	第1土・日曜日	犬山祭の車山行事（犬山祭）	愛知県犬山市
	13～16日	長浜曳山祭の曳山行事（長浜曳山祭）	滋賀県長浜市
	14・15日	高山祭の屋台行事（春の高山祭）	岐阜県高山市
	19・20日	古川祭の起し太鼓・屋台行事（古川祭）	岐阜県飛騨市
5月	1日	高岡御車山祭の御車山行事（高岡御車山祭）	富山県高岡市
	2・3日（ただし、隔年）	知立の山車文楽とからくり（知立まつり）	愛知県知立市
	3・4日	亀崎潮干祭の山車行事（亀崎潮干祭）	愛知県半田市
	3～5日	青柏祭の曳山行事（青柏祭）	石川県七尾市
	4・5日	城端神明宮祭の曳山行事（城端神明宮祭）	富山県南砺市
	3～5日（7年毎。次回はH31予定）	日立風流物（神峰神社大祭礼）	茨城県日立市
	15日までの、15日に近い金～日曜日	大垣祭の鉾行事	岐阜県大垣市
7月	1～15日	博多祇園山笠行事（博多祇園祭）	福岡県福岡市
	1～31日	京都祇園祭の山鉾行事（祇園祭）	京都府京都市
	10日以降の金～日曜日	佐原の山車行事（八坂神社祇園祭）	千葉県香取市
	20・21日	土崎神明社祭の曳山行事（土崎港曳山まつり）	秋田県秋田市
	20日過ぎの土・日曜日	日田祇園の曳山行事（日田祇園祭）	大分県日田市
	第4土曜日を含む金～日曜日	鳥山の山あげ行事（鳥山山あげ祭）	栃木県那須烏山市
	第4土曜日を含む金～日曜日	戸畑の園大山笠行事（戸畑祇園祭）	福岡県北九州市
	第4土曜日と翌日の日曜日	尾張津島天王祭の車楽舟行事（津島天王祭）	愛知県津島市
8月	1・2日	須成祭の車楽船行事と神葭流し（須成祭）	愛知県蟹江町
	1～3日	八戸三社大祭の山車行事（八戸三社大祭）	青森県八戸町
	第1金・土曜日	魚津のタテモン行事（魚津まつり）	富山県魚津市
	第1日曜日を最終とする金～日曜日	桑名石取祭の祭車行事（桑名石取祭）	三重県桑名市
	14・15日	鳥出神社の鯨船行事	三重県四日市市
	19・20日	花輪祭の屋台行事	秋田県鹿角市
	24～26日	新庄まつりの山車行事（新庄まつり）	山形県新庄市
9月	7～9日	角館祭りのやま行事（角館のお祭り）	秋田県仙北市
10月	9・10日	高山祭の屋台行事（秋の高山祭）	岐阜県高山市
	第2土曜日を挟む前後3日	佐原の山車行事（諏訪神社大祭）	千葉県香取市
	第2土曜日・日曜日	鹿沼今宮神社祭の屋台行事（鹿沼今宮神社祭）	栃木県鹿沼市
	第3土曜日・日曜日	川越氷川祭の山車行事（川越氷川神社例大祭）	埼玉県川越市
	23～25日	上野天神祭のダンジリ行事（上野天神祭）	三重県伊賀市
11月	2～4日	唐津くんちの曳山行事（唐津くんち）	佐賀県唐津市
	22・23日	八代妙見祭の神幸行事（八代妙見祭）	熊本県八代市
12月	2・3日	秩父祭の屋台行事と神楽（秩父祭）	埼玉県秩父市

3.3.2 「山・鉾・屋台」行事とは

「山・鉾・屋台」行事は現在 33 件登録されている。「文化遺産オンライン」⁸によると下記のように定義されている。

地域社会の安泰や災厄防除を願い、地域の人々が一体となり執り行う「山・鉾・屋台」の巡行を中心とした祭礼行事として提案。国指定重要無形民俗文化財に指定されている 33 件の山・鉾・屋台行事により構成され、保護措置として、伝承者養成、行事等の記録作成、原材料確保、行事の用具修理・新調等を実施。(下線引用者)

現在、ユネスコ無形文化遺産保護条約に登録されているのは、33 件であるが、もともとは 2009 年登録の「京都祇園祭の山鉾行事」と「日立風流物」の拡張である。33 の構成は表 2 の通りである。色のついている所は調査で調べた場所である。それぞれの場所で、独特の山・鉾・屋台が登場する。

青森県で馴染みのあるのが、八戸市の三社大祭である(第 2 部、0 参照)。からくり仕掛けの山が登場し、毎年注目を集める。その制作技法も凝っており、職人と呼べる人々が技巧を駆使する。また表には掲載されていないが、野辺地祇園祭の山車やむつ市の田名部祭りの山は技巧を凝らした風流といえるものである。第 2 部(1 参照)で扱う、秋田県鹿角市花輪の行事に登場する屋台も伝統を担った素晴らしい山である。こうしてみると全国的にはそれほど知られていないが、祭礼における山車には各地域の伝統的な工芸技術が凝らされており、それは民俗文化財と呼ぶにふさわしいものが多い。先にのべたが、「市民の祭」と「伝統の祭」はこういった、伝統を受け継いだ山・鉾・屋台といった山車の存在の有無もあるのではないか。

その他、「眠流し」行事と違う点として、例祭の開催時期である。それぞれ例祭の開催時期に各地の起源やいわれがある。例えば当地の神社が建立された日などである。これはそれぞれの歴史を紐解かないとわからないものである。「眠流し」行事が必ず 8 月 7 日(旧暦の 7 月 7 日)に終わるのは、それが季節や暦と関係した年中行事としての意味を持つためである。

4 祭礼と社会

これまで見てきたように、「青森ねぶた祭」の近隣の祭礼、さらに祇園祭から伝搬された祭礼文化は、それぞれの土地で固有に発展しつつも、その祭の形態や登場する「モノ」に関して関連性があることがわかった。ここではもう少し、祭礼や年中行事の持つ意味を考えていくことにする。そして各地で行われた祭礼や年中行事は、本来的な意味を失いつつも、「モ

⁸ HP「文化遺産オンライン」>「無形文化遺産」>「山・鉾・屋台行事」(参考 URL、https://bunka.nii.ac.jp/special_content/ilink)

ノ」を通じて伝統・文化は継承されていることを述べていくことにする。

4.1 祭から祭礼へ：意味の変容

さてもう一度、祭もしくは祭礼の意味に関して確認しておこう。柳田は著書『日本の祭』の中で、その起源や現在に至るまでの経緯を詳細に述べている。祭の形態の変化については詳細に述べないが、よく知られている説ではあるが、「祭礼」について柳田の説をまず紹介しておく。

柳田は日本の祭の最も重要な一つの変わり目として、「見物という群の発生」を指摘する。すなわち「信仰を共にせざる人々、言わばただ審美的立場から、この行事を観望する者の現れたこと」である（柳田 1969＝2013：42-43）。その結果祭は「見られる祭」として、美しくしようと心がけられるようになった。またそもそも「日本の祭」は夜から朝の御饌まで、夜通し奉仕するものであったが生活事情の変化により、その儀式も変化していったという。すなわち「一方に宵暁の御饌の間隔が、できるだけ短縮させられたと同時に、他の一方では祭の時間が前と後へ延びて、日中屋外での所作ばかり多くなり、また重いものと見られるようになってきた」という。これが「祭から祭礼への推移」であったと柳田は述べている（同：49）。これに照らして言えば、「眠流し」といった年中行事は、日常生活の区切りであり、主に収穫前の夏、もしくは秋の収穫祭の行事が主だった。つまり都市型の祭礼ではなく、農耕文化中心のものであったといえる。こうした豊作を願う「祭」などは、社会が都市化し、稲作文化が減退することによって、年中行事の意味は徐々に喪失することになる。結果として、その本来的な意味は失われ、「見られる祭」としての祭礼のみが残っていったと考えられる。すなわち柳田の言葉を借りて言えば、「多くの土地の祭を『祭礼』にしてしまったのは、全体としては中世以来の都市文化の力であった」といえる（同：58）。

4.2 現代における祭礼の役割

では、そういった祭礼は現在どのような意味や役割を持っているのか。現代的な意味を少しだけ整理しておく。まずいえるのは、現在の「祭礼」は日常生活・社会の中に埋め込まれた形で存在している。もちろん「年中行事」としての役割は持つものの、それは単なる民俗行事でも神事でもなくなっている。

第一に指摘できるのが「観光資源」という経済的な側面である。「見られる」という前提があることは同時に、集客、経済効果といったものが指摘される。祭礼と観光といったものは現代において切り離すことはできない。もちろん、そのために祭を運営する主体側の意識や、参加に対するモチベーションなども変化し、様々な問題もおこっている⁹。

⁹ 近年の「青森ねぶた祭」の問題の一つとしては、「祭は誰のためのものか」というものがある。すなわち実際の主催側、参加者が楽しむための祭ではなく、徐々に観光客のためのショーになっているということである。この点に関しては、すでに2014年の報告書（佐々木 2015）であつかっているのをそちらを参照してほしい。

第二に祭礼が年に一度の大きなイベントとしての意味を獲得するに従い、その準備にかかる時間も増大してくる。そのため、まさしく日常的に祭礼について議論することも増える。そういった祭礼を通じたコミュニティ、共同意識が増大するということも指摘できる¹⁰。近年「青森ねぶた祭」に関して調査を通じて見えることは、この祭礼を通じて「青森市民」というアイデンティティや共同意識の一部が形成されていることである。2世代、3世代にわたりねぶたに関わっている団体もあれば、ここ10年程度で立ち上がっている自主的な独立団体もある。こういう団体は日ごろからねぶたに興味を持ち、さらには津軽の文化伝承も考えた活動を行っている。

第二とも関連するが、第三に共同体といった「横の意識」だけでなく、伝統的にやってきたという自分たちの歴史意識「縦の意識」が創られることも重要である。そこでは、これまで培われてきた、伝統行事と現在の行事をどのように融合させ、さらに若い世代に今後伝えていこうかといった取り組みが行われる。また技工物(祭に関連する制作物)や演奏(囃子)などは、これまで伝えられてきた技などが継承される場でもある¹¹。またそれらに興味を持つ子どもに教えることで、伝統芸能の歴史がつながっていく。もちろん過去の活動記録のアーカイブ化なども進み、それが各地域での博物館や資料館、伝承館の核となっている。地域の歴史の再構築につながっているといえるだろう。

第四に、祭りを通じた人のかかわりにもう少し踏み込んでいけば、地元の伝統的な祭りに主体的に関与することが、「名誉」となることがある。武田(2019)はこれを「用益」としてとらえたが、これは「青森ねぶた祭」で毎年なぜ企業やそのほかの団体が「ねぶた」を出陣させるか、また祇園祭りにおいて、なぜ町会が高い費用をかけてまで、毎年山・鉦などを制作するかなどを説明するときに役立つ。例えば経済的な損得を超えた、もっと言えば赤字覚悟で名誉、誇りのために祭りに投資するケースがまれにみられる。まさしく私財をなげうって祭りに誇りをかけるのである。こうした生きる目的、参加者の理念実現のためといった意味や役割も持つ。

第五に指摘した意味や役割が結果的に、広範なネットワーク、すなわち様々な人的つながりの成立をもたらすことになる。このつながりは、いわゆる居酒屋で隣に座った人と話すネタレベルから、SNS等を媒介とした世界的なネットワークまで広くつながりをもたらす。昨年度、佐々木研究室では市の有志の方と「青森ねぶた祭」のねぶた師のためのクラウド・ファンディングを行ったが、全国から寄付金があつまった。またそこに書かれたメッセージを読むと、「青森ねぶた祭」になんらかの形でかかわった多くの人、そして是非参加したいという人の気持ちが込められていた。祭礼によってこうした有形、無形の繋がりがもたらされることは非常に意味あることであり、祭礼の大きな役割といえるだろう。現代的な祭礼は

¹⁰ この点は山田編著(2016)の祭礼組織を「ソーシャル・キャピタル(社会関係資本)」としてとらえ、山車類を含めて文化資本として分析している視点が参考になる(特に序論、第1章、第2章)。都市祭礼文化の継承はさまざまなネットワークを構築しつつ行われるといえる。

¹¹ 伝統の変容の経緯に関しては阿南(2003)などが参考になる

もはや地域のみならず、全国、全世界へと発信¹²されているのである。

結論

もう一度本稿の目的にもどっておこう。そもそもの出発点は「青森ねぶた祭」というものが、様々な日本の祭りと類似性やつながりを持っていることを考察することにあつた。これは各地の実際の祭りに関する造形物、成立の歴史的背景、少数ではあつたが関係者への聞き取りでその双方向的な影響が明らかになったといえる。もちろんもっと具体的なレベル、たとえば山・鉦・山車と灯籠山車などの制作物としての類似性や、祭りを運営する人々の思いや運営のやり方などを今後調べていく必要はあるだろう。

また「青森ねぶた祭」が祭礼としての最高峰とまでは言わないが、やはり全国的に注目される大きな祭の一つである理由は、本州最北端に様々な文化が流れてきたから、という仮説は成り立つであろう。この点は北海道との交易通路としての青森という土地からまた考察しなくてはならないだろうが、それを証明するに足る史料は存在しており、別稿であつてみたい¹³。

さて、冒頭に述べたように本稿でまとめとして主張しておきたいのは、祭礼の現代的な意味を端的に述べれば「祭礼＝メディア」であるということである。そしてそのメディアとしての機能が最も象徴的に機能しているのが、山・鉦・山車、灯籠といった「モノ」だといえる。すなわちこの「モノ」の具体的な芸術性、そこにかかわる人々の営為、歴史性、具体的な伝統文化性をみるこそが重要なのである。

マーシャル・マクルーハン著『メディア論』の中で、「メディアはメッセージである」と指摘する。そもそもメディアとは「媒介するもの、媒体」といった意味を持つ。文字通り考えれば、通信（電気、光）そのものを指すだろう。ただしメディアには「モノ（＝器具）」も含まれる。例えば電話や携帯などはわかりやすい。こうしたメディアは通常、中間に位置し、何かを伝える役割を持つとされる。しかしながらマクルーハンはこうした機能と共に、メディア自体が意味を持ちメッセージを創り出すことに注目する。例えば、自動車も一つのメディアととらえる。自動車は移動するための手段である。しかし同時に、自動車があるために、道路が整備され、道路標識が多く作られる。また歩行者専用の歩道ができる。すなわち自動車が同時に社会の在り方を規定するのである。同様のことは他のメディアにも言える。近年注目を集めているズボフ（2019）の「監視資本主義」における、インターネット（アップルやグーグルの功罪）についても、同様の論理が指摘されている。すなわちインターネットを通じた、購買や情報発信は便利ではあるが、それが同時に個人のプライバシーを侵害するどころか、個人の趣味趣向を先読みして、情報が提供されることが生じているのである。

¹² 大英博物館での制作ほか、海外でも高い評価をうけている。ロスアンゼルス出張については阿南（2008）を参照。

¹³ 第2部の4のまとめで、北前船の西回り航路と東回り航路について言及しているが、これはまさしく、一時期青森が本州と北海道を結ぶ重要な起点であったことを示している。そしてその港町であった現在の青森市は商業の街として発展し、上方の文化の影響を強くうけてきたといえる。この点は青森の歴史を紐解くまでもなく通説となっている。

すなわちわれわれの情報が吸い上げられ、それがいつの間にか使用され、消費行動を含めた思考が誘導されていることが指摘される。ここでメディアの功罪について論じることは目的ではないので、「監視資本主義」に関しては別稿であつかうことにするが、いずれにせよメディアはそれ自体がわれわれの社会を創り出す機能を持つということである。

では本稿における祭礼／「モノ」とはどのようなものか。祭とはそもそも「人」と「神」を媒介する儀式であり、また山車や灯籠といった「モノ」はそのための道具であった。すなわち祭自体にはメディアとしての機能が当初から含まれていたといえる。これが、時代がたつにつれて、「人」と「神」の媒介であると同時に、「祭」そのものを行うことが一つのメッセージ性を持ち始める。すなわちそれが先にみた「観光資源」「歴史伝統」「共同意識」「名誉」などである。つまり、先の役割とは、祭礼の役割であると同時に、祭礼があるからこそ生み出された社会的事実だと言える。つまり祭礼があることそのものが、当該社会、より具体的に言えば地域社会（の特色、生活スタイルなど）を創り出しているのである。私は青森に來た当初、なぜこれほどまでに、年間を通して「ねぶた祭」で話が盛り上がるのかという疑問を持った。そして祭自体が生活世界に埋め込まれていることを肌で感じた。しかしながらそれは同時に、「祭礼＝青森ねぶた祭」があるからこそ、青森市、青森市民が創られているということでもある。だとするならば、今後見ていくことは、祭礼およびそこに登場する「モノ」のメディア性を丹念に記述していくこと、場合によってはそこに関わる人の思いや意識を書き留めていくことが重要になってくる。

残念ながら本稿においては、最終的には「祭礼とはメディアである」という仮説を完全に立証したとは言えないだろう。まだアイデアの段階であり、この証明のために、今後「青森ねぶた祭」における「ねぶた」というモノの機能を、それを通じた人のつながり、技術の推移、歴史性、文化性、祭礼との関わりなどをつぶさに記述していくことが必要となる。それはまた次の課題として提示しておく。

本稿はそこに至るために研究ノートとして提示しておくことにする。

参考文献

- 阿南透 2003 「青森ねぶたの現代的変容」『国立歴史民俗博物館研究報告』103, : 263-299
 —— 2008 「祭りの海外遠征—ロスアンゼルス・の青森ねぶた—」『江戸川大学紀要』18号 : 21-39
 —— 2014 「『となみ夜高まつり』の成立」『江戸川大学紀要』24号 : 81-93
 秋田みなと振興会 2013 『土崎神明社祭の曳山行事』
 文化遺産オンライン (https://bunka.nii.ac.jp/special_content/ilink1)
 千葉大学 倉阪研究会 都市・交通分科会 2013 「祭で地域のつながりは再生できるか」
 ISFJ 論文ライブラリ (http://www.isfj.net/article_search.html)
 花輪ばやしマガジン製作実行委員会 2019 『花輪ばやしマガジン 2019 Vol.33』

- 岩手県教育委員会 2000『岩手の祭り 行事調査報告書』
- 角館町観光協会 祭典伝承委員会 1985『角館の祭典』
- 角館のお祭り保存会 2019『角館のお祭り』
- 角館町教育委員会 1997『角館祭りのやま行事報告書』
- 小松和彦 2016「第二節 都市祭りとしての青森ねぶた」『増補版 青森ねぶた誌』青森市：9-18
- 2016「第三節 列島の中の青森ねぶた」『増補版 青森ねぶた誌』青森市：19-25
- 2016「第六節 ねぶた起源伝承」『増補版 青森ねぶた誌』青森市：73-78
- 中牧弘允 1979「ねぶたとねぶた--風流の眠流し」『季刊民族学 3』千里文化財団
- Marshall McLuhan 1964 *Understanding Media: the Extensions of Man*, NewYork: McGraw-Hill; London: Routledge and Kegan Paul (=栗原裕／河本伸聖訳 1987『メディア論 人間の拡張の諸相』みすず書房)。
- 佐々木てる編 2015『2014 年度 青森学術文化振興財団事業報告書 「観光としてのねぶた」と「民俗としてのねぶた」』青森大学社会学部 佐々木研究室
- 佐々木てる編 2019『2018 年度 地域連携センタープロジェクト事業成果報告書 「青森ねぶた祭」を作る人々』青森公立大学 佐々木研究室
- 佐々木てる編 2020『2019 年度 地域連携センタープロジェクト事業成果報告書 祭礼の比較研究～青森ねぶた祭・祇園祭・田名部祭りを中心に～』青森公立大学 佐々木研究室
- 武田俊輔 2019『コモンズとしての都市祭礼』新曜社
- 柳田国男 1955『年中行事覚書』(Kindle の位置 No.1685-1688). 青空文庫. Kindle 版.
- 1969=2013『日本の祭』角川ソフィア文庫
- 山田浩之編著 2016『都市祭礼文化の継承を変容を考える』ミネルヴァ書房
- 米山俊直 1974『祇園祭：都市人類学ことはじめ』中央公論社
- Zuboff, Shoshana 2019 *The Age of Surveillance Capitalism : The Fight for a Human Future at the New Frontier of Power*, Profile Books (=野中香方子訳 2021『監視資本主義：人類の未来を賭けた闘い』東洋経済新報社)

第二部 調查報告

0 灯籠文化圏調査：青森編

樽井寧々 亀岡紗衣

0.1 調査概要

調査者：佐々木てる、樽井寧々、亀岡紗衣

調査日：2021 年 12 月 5 日～6 日

調査地：青森県 野辺地町 まかど観光ホテル、野辺地 PR センター

青森県 八戸市 八戸駅：ユートリー

青森県 八戸市 八戸市美術館

青森県 黒石市 中町こみせ通り 松の湯交流館、

青森県 黒石市 津軽伝承工芸館

青森県 弘前市 津軽藩ねぶた村

本調査は灯籠文化圏、および青森県の山・鉾・山車行事を中心に行ったものである。青森県内の行事に関しては、地域出身者も多くなじみがあるが故に、なかなか腰をすえて調査を行うケースも少ない。今回はこのあとに続く、秋田・岩手といった灯籠文化行事、山・鉾・山車行事との比較として簡単に紹介することが目的となる。

0.2 山・鉾・屋台行事①：のへじ祇園まつり

のへじ祇園祭は全国的には知名度はないものの、地元の夏を彩る歴史ある祭礼である。京都の祇園祭を模した祭礼ではあるが、社である「のへじ八幡宮」を起点として地元にしっかい根づいた、民俗行事といえるだろう。調査では、実際に運行された山車が、観光ホテルに展示されているということで、見学に行った。また駅に隣接されている「野辺地 PR センター」にて情報を収集した。以下そのまとめである¹。

「のへじ祇園まつり」は、8 月の中旬に 4 日間行われる、野辺地町最大のお祭りである。京都祇園まつりに似た優雅な囃子と山車は、南部藩有数の商港として栄えた時代に北前船に乗って移入された歴史を持つ。祭りの行列には、三つの神社と 10 の祭典部が参加し、作った山車を曳き運行する。

また、のへじ祇園まつりは「船山車（ふなやま）」と「風流山車（ふうりゅうだし）」の二種類の山車が運行される。船山車は「宝船（たからぶね）」とも呼ばれ、山車行列の先頭を歩き、露払い（つゆはらい）の役割をにない、豊漁祈願や航海安全の願いが込められています。風流山車は毎年新しく作り変える山車のことで、山車を作り変えることにより神様や見る人を驚かせたいという意味が込められている。

さらに、祭りの中では、「祇園囃子（ぎおんばやし）」と「神楽」という二種類の囃子が演奏される。祇園囃子は山車の一階で、主に小学生の女の子により演奏されまる。演奏に使う楽器は小太鼓・三味線・笛で、曲は全部で 5 曲ある。また、神楽は各祭典部の山車の前で

¹ のへじ祇園祭に関しては下記のサイトをまとめた。

「のへじ祇園まつり | 野辺地町」「のへじ祇園まつり-野辺地町観光協会」（URL は後記）

われ、笛、手平鉦（てびらがね）、大小の太鼓により全部で3曲演奏される。

野辺地出身の学生も佐々木ゼミには所属しており、やはり小学生の頃に祭に参加し、囃子を奏でたと聞く。風流というにふさわしい祭といえる。



写真 0-1 「まかど観光ホテル」 展示の山車



写真 0-2 「野辺地 PR センター」 ポスター

0.3 山・鉦・屋台行事②：八戸三社大祭

新型コロナの影響で、2021 年の祭は中止になった。しかしながら、八戸の街には各所で三社大祭の雰囲気を感じることが出来る。JR 八戸駅そばのユートリーでは、実際の祭で運行される山車が展示してあると同時に、その歴史も紹介している。これらの情報から三社大祭についてまとめておく²。

まず八戸三社大祭は、7月31日から8月4日の5日間で行われ、祭りの初日である7月31日の前夜祭と最終日8月4日の後夜祭では、中心街にライトアップされた27台の山車が集合する。さらに、8月1日のお通り、8月3日のお還りでは古式ゆかしい三神社の行列が多彩な郷土芸能と華麗な山車を伴って中心街を巡行することになっている。また8月2日の中日の夜の山車運行では、ライトを浴びながら動く仕掛けが八戸の夏の夜空を彩る。

現在の三社大祭は、行列の運行経路や参加する民俗芸能等に古い伝統を保ちながら、民話や歌舞伎などを題材として毎年趣向を競って製作される豪華絢爛な27台もの山車が行列に

² 三社大祭については下記のサイトを参照した。「八戸三社大祭を知る（歴史・豆知識）。

八戸三社大祭 山車の移り変わり 大正から平成まで」（URLは後記）

「附祭（つけまつり）」として加わり、祭りをより華やかで迫力のあるものになっている。祭りを彩る郷土芸能としては、法霊神楽（ほうりょうかぐら）、虎舞（とらまい）、大神楽（だいかぐら）、駒踊（こまおどり）、笹の葉踊（ささのはおどり）、手古舞（てこまい）、華屋台（はなやたい）があり、これらが行列を彩る。

三社大祭の山車は、江戸時代において、毎年同じ人形を屋台にのせていたが、明治期になると、毎年趣向を変える風流山車が作られるようになった。昭和 30 年代の後半からは山車の大型化が進み、やがて機械動力の仕掛けをもつ現在のスタイルになった。

また、八戸三社大祭のはじまりは、凶作を心配した町の有力者たちが、おがみ神社に祈禱を託したところ、見事に天候が回復した。それに感謝して人々は翌年から神輿行列を仕立てて、長者山新羅神社に渡御したとされている。明治になるとこの祭りはおがみ神社、長者山新羅神社、神明宮の三社による合同祭礼となり、現在の八戸三社大祭の原型が出来上がったという。

これらの歴史・変遷が評価された結果、2004 年 2 月に「八戸三社大祭の山車行事」として国の重要無形民俗文化財に指定。さらに、2016 年 12 月 1 日にはユネスコ無形文化遺産「山・鉦・屋台行事」に登録された。青森、そして日本を代表する祭礼の一つといえるだろう。



写真 0-3 ユートリー展示山車



写真 0-4 山車制作

0.4 七夕祭りとしての灯籠文化①：黒石ねぷた祭り

黒石ねぷた祭りは、毎年 7 月 30 日から 8 月 5 日の 7 日間で行われる、県内ではよく知られた祭礼である。7 月 30 日と 8 月 2 日の合同運行では 50 台以上の扇ねぷたと人形ねぷたが出陣する。その様子は、毎年テレビなどでも紹介され、山車が一同に会する光景は壮観である。もちろん一つひとつの武者絵や美人画をゆっくり見ることも楽しみの一つである。調査では中町こみせ通り、津軽伝承工芸館を訪問した。伝承工芸館ではねぷた絵が飾られており、見る人を魅了していた。来年は是非実際の運行をみたい。資料はほとんど収集できなかったものの、ねぷた絵師の方のご好意により、後日『津軽ねぷた論攷 黒石』をお借りすること

ができた。以下黒石ねぶたについてのまとめである³。

黒石ねぶたは青森県の無形民俗文化財に指定された火祭りの一つであり、その特徴は主に二つある。一つ目に扇ねぶたと人形ねぶたがともに出陣する点、二つ目に扇ねぶたでは表に武者絵、裏面に美人画、人形ねぶたでは表面の武者人形に対して、見送り絵では美人画を描き、高欄がついている点である。後者は、扇ねぶたと人形ねぶたに共通して、表面の絢爛豪華に対し徹底して裏面で物寂しさを追求している。このギャップが観客を魅了する。

また、運行時は笛・太鼓・鉦の囃子と大人・子供の「ヤーレーヤーレヤ！」の掛け声が勇ましく、町は熱気で溢れます。他には、黒石ねぶた祭りは、企業参加の数よりも町内参加が圧倒的に多く、ねぶた製作のみならずお囃子の腕前も子供から大人まで町が一丸となって磨きをかけている。

0.5 七夕祭りとしての灯籠文化②：弘前ねぶたまつり

弘前ねぶた祭は新暦の8月1日から7日の一週間おこなわれ、全部で60~70台のねぶたが出陣する。青森ねぶた祭と同様、全国的に有名な東北を代表する祭礼行事といえるだろう。その一端を知るため調査では「津軽藩ねぶた村」を訪れた。そこにはねぶた・ねぶたの歴史を含め、実際に運行される「ねぶた」を見学することができた。弘前ねぶたに関しては、あまた資料があり、ここでは詳しく紹介しない。最低限の情報のみを紹介しておく。

弘前ねぶたは、青森ねぶたと比較して、“静”の弘前、“動”の青森と表現されるように、青森の「ねぶた」が歌舞伎風の人形灯籠であるのに対し、弘前は扇形が主体である。「ねぶた」の表面には三国志などの勇壮な鏡絵が描かれ、見送り絵と呼ばれる裏面には対照的な愁い（うれい）を含んだ美人画が描かれている。さらに、弘前ねぶたは扇ねぶただけでなく、一部人形型の組ねぶたもみられ、青森ねぶたとともに国の重要無形民俗文化財に指定されている。その歴史は、全国各地に残る盆行事の「眠り流し」に属する行事であるとされている。藩政時代は現在のような組ねぶたや扇ねぶたではなく、四角い燈籠に飾りをつけたものや、野菜を形どった組ねぶたであったという。また、運行時は笛・太鼓のお囃子につれて「ヤーヤドー！」の掛け声で氣勢をあげて大勢がねぶたを曳き、町がねぶた一色に染まる。ねぶたは各町内会、愛好会、職場団体等が運行するが、ねぶたの骨組み、絵、囃子等にたずさわる人々は、弘前市内全域にわたっている⁴。

0.6 七夕祭りとしての灯籠文化③：五所川原立佞武多

最後に今回の調査では直接は訪問しなかったが、青森の代表的な祭礼である「五所川原立佞武多」についても少しふれておく⁵。

五所川原立佞武多は8月4日から8日の5日間で行われ、立佞武多の館から立佞武多が出陣し五所川原市街地を練り歩く。立佞武多は大きいものだと高さ約23メートル、重さ約19トンもある。

³ 引用は主に下記のサイトより。「石ねぶた祭りー黒石市。黒石ねぶたまつり | 一般社団法人 黒石観光協会」(<https://kuroishi.or.jp/>)

⁴ 参考にしたサイトは「弘前のねぶた」(<http://www.city.hirosaki.aomori.jp/>)である。

⁵ 参考サイトは「五所川原立佞武多」(<http://www.city.goshogawara.lg.jp/>)。

運行時は、大太鼓を先頭に、台車に乗せた立佞武多を数十人の引き手が台車の左右に付けたロープにとりつき2列になって曳く。2列の間には、太鼓、笛、手平鉦で構成される数人の囃子方がお囃子を奏し先頭となり、次いで数十人のハネトが「ヤッテマレ」などのかけ声をかけてはねながら続く。ねふたは江戸時代後期から大型化し、明治時代に入りますます大きくなり高さが20～30メートル級の巨大ねふたが出現するようになった。このころから五所川原でも高さ約27メートルにおよぶねふたがつくられていたが、電灯線や電話線が張り巡らされるようになると高さが制限され、小型化していったと伝えられている。

現在の「立佞武多」は、明治40年代に作られていた、高さ約27メートルに及ぶ古い「ねふた」の写真を見て復元を試みた有志が、平成8年に高さ22メートルの巨大ねふたを製作したことがきっかけで復活した。その後、平成10年からは、運行経路となる路上の電灯線、電話線を整理し、市街地での立佞武多の運行を可能とした。そこから祭り名を「五所川原立佞武多」として現在にいたっている。約90年ぶりの復活と言われている。

この立佞武多は五所川原市にある「立佞武多の館」の展示されており、いつでも実際に運行される実物を見ることができる。現存する灯籠、山車の中でも最も大きいものといえ、見たものはその迫力に圧倒される。

0.7 まとめ

青森ねぶた祭をはじめとして、黒石ねぶた祭り、弘前ねぶたまつり、五所川原立佞武多の灯籠文化の祭りの起源として「眠り流し」が関係し、そこから大型化や、その地域ごとに扇型や人形型などに発展してきたことが理解できる。

また、青森ねぶた祭や八戸三社大祭、五所川原立佞武多の祭りの変遷をたどると、現代の技術などの変化により、ろうそくが電球に変化、人力が機械動力に変化、電柱などができたことによる小型化など、時代に合わせて祭りの形も変化していることが印象的であった。

参考文献

笹森建英／中田伸一編 1995『津軽ねぶた論攷 黒石 《分銅組若者日記》解』黒石市青年会議創立40周年記念

参考URL

八戸三社大祭を知る（歴史・豆知識）(<https://visithachinohe.com/>)

八戸三社大祭 山車の移り変わり 大正から平成まで (<https://i.ytimg.com/>)

大迫力の山車はもはや芸術の域！三社大祭の魅力 (<https://lh3.googleusercontent.com/>)

のへじ祇園まつり | 野辺地町 (<http://www.town.noheji.aomori.jp/>)

のへじ祇園まつり (<https://www.aptnet.jp/>)

のへじ祇園まつり-野辺地町観光協会 (<https://image.jimcdn.com/>)

黒石ねぶた祭り－黒石市 (<http://www.city.kuroishi.aomori.jp/>)

黒石ねぶたまつり | 一般社団法人 黒石観光協会 (<https://kuroishi.or.jp/>)

弘前のねぶた (<http://www.city.hirosaki.aomori.jp/>)

青森・弘前、二つのねぶた・ねぶた－あおもり教育旅行ガイド (<https://www.aptnet.jp/>)

五所川原立佞武多（ごしょがわらたちねぶた） (<http://www.city.goshogawara.lg.jp/>)

1 灯籠文化圏調査：秋田編

七海香穂 小田麗華 川口華流

1.1 調査概要

調査者：佐々木てる 佐々木世奈 川口華流 小田麗華 七海香穂

調査日：2021年6月25日（金）～27日（日）

調査地：秋田県 鹿角市鹿角観光ふるさと館「あんたらあ」 祭り展示館（道の駅かつの）

秋田県 能代市 能代ねぶ流し館

秋田県 秋田市 ねぶり流し館

秋田県 秋田市 秋田県立博物館

1.2 各地の祭礼について

①秋田県鹿角市「花輪ばやし」

まずわたしたちは6月26日に秋田県鹿角市にある道の駅かつの「あんたらあ」に訪問した。そこでは、「花輪ばやし」に関する展示がされている。「花輪ばやし」は、東京都にある神田囃子、京都府にある祇園囃子と並ぶ日本三大囃子の一つである。祭り展示館では、花輪祭りの様子を放映した映像や、花輪ばやしの演奏が流れており、実際の雰囲気を経験することができた。

「花輪ばやし」は、花輪の総鎮守、幸稲荷神社に奉納される祭礼囃子のことを指す。起源は、幸稲荷神社への人々の厚い信仰心にある。花輪ばやしは、「産土神（うぶすながみ）さん」として親しまれ、古くから人々の厚い信仰を受けてきた幸（さきわい）稲荷神社の祭典の中で披露されるという。この祭典では、毎年8月16日から5日間かけ、本殿から神様を移動させる神興渡御（みこしとぎょ）が行われる。御神体は、各町内を一巡し、祭典の最終日である20日に山の本殿に還御（かんぎょ）されるが、還御されるまでの間、里宮として谷地田町にある御旅所（おたびしょ）に安置される。この中の19日、20日の2日間を、「花輪ばやし」と呼び、地元の人はもちろんのこと、観光客も訪れて、華やかな賑わいを見せている。そして、花輪ばやしは、ユネスコ無形民俗文化財にも指定されていることから、鹿角市だけでなく、秋田県を代表するお祭りにもなっている。

花輪ばやしには十町内が参加している。上五町と下五町の形10町内が囃子を継承して屋台を巡行している。町内ごとで屋台が持つ特色が異なるため、花輪ばやしはそれぞれの町内の「いろ」をうかがうことができる。

★上五町 舟場本町（唐破風を生かした造り）

舟場町（十体の獅子頭を抱く名工の造り）

新田町（贅を尽くした、総樺の重厚の極）

六日町（古よりの型を忠実に再現）

谷地田町（金箔と総漆塗りの重厚な造り）

- ★下五町 大町（歴史が誇る風格と堀の深さ）
- 旭町（伝説の里・鹿角を象徴する）
- 新町（純金箔光る絢爛足る美しさ）
- 横丁（赤が映える荘重かつ近代的な屋台）
- 組丁（格天井による囃子の美しき響き）

写真 1-1 は「船場元町」である。鬼板という屋根の上にある装飾が昇竜で、その下にある懸魚（げぎょ）という場所に装飾されているのが鳳凰となっている。背面には金箔の鶴と亀が装飾されている。昭和 54 年 3 月に台風により、旧屋台が破壊されてしまったため、町内の人々が団結し、作り直したという逸話の残る名屋台である。

写真 1-2 は「横丁」である。こちらは、町内の工人技術者によって昭和 52 年に造られた。前面に須佐之男命伝説が、背面にから唐獅子（からじし）と牡丹が彫刻師、田中吉蔵の手によって彫り込まれている。また、全体的に赤を主体としており、おごそかな中にも近代的な雰囲気が光っているように思える。

写真 1-3 は「組丁」である。こちらは、昭和 40 年に完成した本屋台であり、初めて宮大工ではなく地元の大工によって造られたという。十和田産の緋柱を用いて、太鼓の反響をよくするために格天井を貼り匂欄（こうらん）をめぐらせるなど、様々な工夫が凝らされています。

祭り展示館では、実際の花輪ばやし映像で放映されており、その場で祭りの雰囲気を楽しむことができた。花輪ばやしは、一見すると同じように見える屋台だが、繊細な彫刻が施されており、魅力を感じた。また、ひとつひとつの屋台に込められている思いを知り、伝統的な文化や地元の人たちの厚い信仰が感じられ、強く印象に残った。



写真 1-1 船場元町



写真 1-2 横丁



写真 1-3 組丁

②秋田県能代「能代ねぶ流し館」

「能代ねぶ流し館」には祭りの期間中にしか見ることのできない灯籠が 2 台美しくライトアップされていて闇に浮かぶ灯籠を間近で見ることができた。また、歴史や概要がわかりやすく解説されていて、実際の祭りの映像も放映されている。さらに、坂上田村麻呂の時代

までさかのぼるといわれている伝説の能代凧も展示されていた。

「能代ねぶ流し」の起源は千年以上前、阿倍比羅夫や坂上田村麻呂が蝦夷との戦いの際、多数の灯籠を用いて蝦夷を威嚇したことが始まりという説や、秋の豊作の祈願、暑い夏の眠気覚まし、疫病払いとして米代川に灯籠を焼き流したという説など様々な起源説がある。灯籠が運行されるのは能代市内で、最後に鯨が流されるのは能代港下浜ふ頭である。「能代ねぶながし」は、毎年8月6日と7日の2日間行われる。1日目は山車が市内の運行コースを巡り、2日目は燈籠の鯨に火をつけ米代川に流すシャチ流しが行われるのが特徴である。祭りの内容としては、千年以上の歴史を持つ城郭型の大型灯籠が、華麗な笛、太鼓のお囃子を伴い、大勢の若者によって市内をねり歩く（写真 1-4、1-5）。

起源は先ほど説明した通り様々な伝説があるが、実際の様子は寛保元年に宇野親員が記した「代邑見聞録」に記録されている。このころから、今とは違う形だが、眠り流し行事が行われていたことがわかる。この眠り流しは、夏の睡魔とともに穢れと悪霊を流し、無病息災、家内安全を祈るお盆の行事の一つとして秋田県だけでなく広い地域で行われていた。

この約 70 年後に能代のねぶ流しは大きく変化した。文化 12 年ころ、灯籠は大勢の人で担ぐ形だったが、灯籠が大きくなるにつれて車輪を付けて曳き廻すものになった。明治後期に現在のような城郭型灯籠が主流になったようである。城郭型灯籠は明治後期から大正初期にかけて製作技術を競い、規模も巨大化して能代七夕のシンボルになっていったと伝えられている。しかし明治 41 年から始まる能代市街の電線、電話線の架設に伴い、巨大灯籠の運行は制限され、小型化した現在の形状と変化した。戦時中は能代七夕行事が中止となっていたが、終戦の翌年、昭和 21 年には復活を遂げ今日まで伝統は守られている。平成 25 年には電線が地下に埋められた国道 101 号線で 100 年ぶりに再現された大型の城郭型灯籠が曳き回され、能代七夕の伝統が現在まで受け継がれている。



写真 1-4 城郭型灯籠



写真 1-5 市内を動く様子⁶

⁶ あきたタウン情報「能代七夕」ウィーク！（<https://web.akita-townjoho.jp/event/20190730-noshiro-9/>）

能代ねぶ流しは、明治時代が全盛期であるとされている。製作技術を競っていたという点は、青森ねぶた祭に通じるものがある一方で、ねぶた祭とは違った迫力があつた。全盛期が明治時代であるとされていますが、ここからさらに明治時代を超える全盛期を迎えてほしいと感じた

③秋田竿燈祭り

6月27日、秋田県秋田市にある「秋田市民俗伝承館ねぶり流し館」に訪問した。民俗芸能伝承館は、竿燈をはじめとする郷土の民俗行事や芸能の保存伝承を目的とし、「ねぶり流し館」の愛称で親しまれている。1階の展示ホールでは演技を実際に体験できるコーナーがあり、2階、3階の展示室では、秋田の民俗芸能について関連資料が展示され、映像も放映されていた。

秋田竿燈祭りは毎年8月3日から6日の4日間に秋田市で行われる。祖先の霊を弔う行事に、豊作を望む庶民の祈願が結びついた「ねぶり流し」に由来し、竿燈の名称は明治期に名付けられた。祭りの形としては、はじめは、身についた悪霊などを川に流し、夜は提灯を高くかざして歩く行事だったが、そこに妙技が加わり現在の形に至った。

竿燈祭りは青森ねぶた祭、仙台七夕まつりと並び東北三大祭りと言われ、国の重要無形民俗文化財にも指定されている。東北三大祭りという名称がいつから存在したかは不明だが、1985年に国鉄が3つの祭りを東北三大祭りとし、周遊券を発売し、首都圏で人気の祭りとなった。またすでに指摘したが、起源は「ねぶり流し」に由来する。かつて人々は、豊作を祈ることから夏の睡魔や穢れを恐れ、それを川に流すことで解決しようとしていた。そして、現在では、ロウソクを灯した提灯を吊るす大きな竿燈をいかに見せるかが祭りの醍醐味となっている。およそ800mもある竿燈大通りと言われる通りで、280本もの竿燈が一斉に掲げられ、幻想的な景色を作り出している。祭り期間中の8月4日～6日には竿燈妙技会が開催され、竿燈の差し手、囃子方の精鋭たちが、日ごろ鍛えた技を競い合う。妙技をさらに際立たせる囃子方は、1967年から女性の参加がはじまり、たくさんの秋田市民が竿燈祭りに参加しているという。

竿燈は、最も大きい大若で、約8mの親竹に約1.2mの竹をつなげ、さらにそれを2本継いで約10.4mもの長さになり、そこに46個もの提灯が加わる。この竹を絶妙な構えで均衡を保ったり、さらに長さを出したりして繰り広げられる妙技はまさに伝統の技と言えるだろう。技の種類は、左上から平手、肩、額、右側の流し、腰の5つある。流しという技では、次の差し手へ傘を渡すことや、技から技への写しが行われるというように均衡感覚を保つことが特に難しくなる。このような妙技は祭りに欠かせないものであり、妙技が継承されることで、祭りが現在まで伝承されてきたということが分かる。

今回の調査で、ねぶり流し館を訪れた際、体験コーナーで実際に竿燈を掲げている男の子がいた。お話を聞くと、秋田市に住む地元の子で、竿燈を掲げる練習をしているとのことであった。私たちも体験したが、小さいサイズでもバランスを保つことはとても難しかった。体験コーナーにいた男の子は、大きいサイズの竿燈を掲げており、将来に向けて祭りが継承されていく様子を直接体感できたような気がした。また、妙技の難易度が高くなるほど練習量も多くなると考えられるが、毎年妙技会が開催されていることから、秋田市民の竿燈に対する情熱を感じることができた。一方で、現在の形は異なるが、「ねぶり流し」行事から発

展したという点では青森のねぶた祭とも共通する点があるということが分かった。



写真 1-6 秋田県の民俗芸能伝承館



写真 1-7 竿燈の体験コーナー

④七夕絵どうろう

七夕絵どうろうまつりは、秋田県の湯沢市行われる祭りである。そこでは、写真（1-8, 1-9）のような絵どうろうが湯沢市の大通りに展示される。2021 年はコロナウイルスの影響によりオンラインで開催されていた。毎年 8 月 5 日から 7 日までの 3 日間開催され、たくさんの浮世絵美人が描かれた絵どうろうが数多くお披露目されるという。

今回はその絵どうろうが県立博物館に展示されているということで、見学にいった。解説によると、夕絵どうろうの起源は秋田藩佐竹南家 7 代目義安公に京都の公卿鷹司家から嫁入りした姫君が京都への懐かしい思いを五色の短冊に託し竹に飾ったことが始まりと言われている。そのため、七夕絵どうろうは京都の七夕祭りを模して始まったという。



写真 1-8 博物館展示の絵どうろう①



写真 1-9 博物館展示の絵どうろう②

実際に絵どうろうを見ると、とても美しく、これが街の大通りに展示される壮観であろうと感じた。灯籠の一種ではあるが、湯沢で独自に発展したものだと感じた。

参考資料／参考 URL

『花輪ばやしマガジン』

花輪ばやし | 花輪祭の屋台行事 (hanawabayashi.jp)

花輪ばやしの概要・歴史 | 花輪ばやしとは? | 花輪ばやし若者頭協議会 (hanawabayashi-wakakyo.info)

能代の七夕行事 | 秋田県能代市の伝統文化 (welcomenoshiro.com)

秋田竿燈まつり-Akita Kanto Festival-公式ホームページ (kantou.gr.jp)

七夕絵どうろうまつり 2021 【七夕絵どうろうとは】 (city-yuzawa.com)

2 灯籠文化圏調査：秋田・山形編

工藤恵 前川美穂香

2.1 調査概要

調査者：佐々木てる 神なぎさ 工藤恵 前川美穂香

調査日：2021年8月8日（日）～11日（水）

調査地：秋田県 鹿角市 仙北市観光情報センター

山形県 酒田市 酒田市立資料館

秋田県 秋田市 ねぶり流し館

秋田県 秋田市 土崎みなと歴史伝承館

2.2 角館祭りのやま行事

「角館祭りのやま行事」は秋田県・角館のお祭りで、地元の人たちからは「角館のお祭り」と呼ばれている。秋田県ではかなり有名な祭である。2021年は新型コロナの影響で開催されなかったものの、山が展示されたという報道もなされていた⁷。この祭に関しては、仙北市観光情報センターで情報が収集可能ということで、現地を訪問した（写真 2-1）。以下「角館祭りの山行事」を紹介しておく⁸。

「角館祭りのやま行事」の開催期間は9月7日から9日までの3日間で秋の豊作を祝う祭りとして、角館地域の鎮守である神明社と成就院薬師堂の祭典に併せて開催されている。平成3年（1991）に国の重要無形民族文化財に指定され、平成28年（2016）に「山・鉾・屋台行事」のひとつとしてユネスコ無形文化財遺産に登録された。江戸時代からの神仏への信仰とともに、地域の「繁栄・豊作・無病息災」を願う角館の人々によって引き継がれてきた。現在も神の降臨を願い、日々の生活が安泰に過ごせるように、庶民の素朴な祈りを込めた行事として継承され続けている。またこのお祭りには神を待ち、神をいただくという素朴な信仰が色濃く残っていると言われている。



写真 2-1 仙北市観光情報センター

祭りの始まりはおおよそ約 400 年前まで遡るという。元々別日に行われていた神明社と薬師堂の祭りが一緒になり、現在の祭りの形になったと言われている。戦時中は運行の担い手

⁷ NHK NEWS WEB 「無形文化遺産『角館のお祭り』中止で武者人形を展示 秋田」2021年9月6日
(<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210906/k10013247241000.html>)

⁸ 主に「仙北市観光情報トップページより・角館のお祭り」を参照してまとめた。
(https://www.city.semboku.akita.jp/sightseeing/spot/07_kakumatsuri.html)

だった若者が減少し、一台のみの運行になるなど、存続の危機に見舞われたこともあったらしい。しかし有志が集い、山の運航は途絶えることはなかった。こういったエピソードからも角館の人々にとって、この祭りは心の支えであり、愛され続けている祭りであることが伺い知れる。

このお祭りでは、各丁内から武者人形や歌舞伎人形を乗せた曳山が曳き回される。曳山には、笛や大太鼓などの楽器を使用し、「おやま囃子」というお囃子を奏でる人たちが乗り、演奏している。その際に踊り手である女性陣、秋田おばこたちも曳山に乗り、艶やかな手踊りを披露する。今では曳山としてお祭りに浸透しているが、明治43年までは、曳山ではなく担ぎ山であった。大きいもので高さ18メートルほどのものもあったらしい。変化の背景として、主要であった男性の担ぎ手不足や電線の架線の影響があったという。結果、山の小型化が起こり、現在の曳山へと変化していったという。

曳山は、時代の流れに合わせて変化してきた。曳山を彩る人形や囃子の魅力についても、紹介しておく。まず囃子と踊りについてである。囃子は、大太鼓、小太鼓、三味線などの5つの楽器から奏でられる。6〜7人ほどが山に設けられた狭いスペースで演奏する。お囃子には進行方向を促す役割や、余興を盛り上げる役割もある。また踊り手も同様に、お囃子に合わせながら、曳き回しの最中は常に踊り続けるという。

山を飾る人形について特徴を述べておく。山には武者人形や歌舞伎人形が、後ろ側に飾られ、曳山を彩っている。飾り人形の歴史も曳山と同様に古く、その始まりは元禄時代の角館のお祭り、鹿島祭りに遡るほど歴史があるものとされている。今も当時の流れをくむ人形師によって作り続けられている。しかし現在丁内で飾り人形の製作者は一名しかおらず、後継者不足が課題となっているらしい。

その他、このお祭りの魅力として「やまぶっつけ」写真2-2という大きな見せ場も挙げられる。このお祭りは曳き回しの進行時間が決められていないため、祭りの最中に通行優先権をめぐる掛け引きが起きる。その交渉が決裂してしまうと起こるのが、「やまぶっつけ」である。曳山がぶつかり合う激しさから、祭りの中で一番盛り上がる場面だといえる。多



写真 2-2 やまぶっつけ⁹⁾

くの観光客もこれを目当てに足を運ぶそうだが、現地の方は「やまぶっつけ以外の祭りの魅力にも目を向けてほしい」と話していた。調査で気づいた点としては以下のことが挙げられる。①お囃子について、進行方向を誘導するという使い方をしている点、②社会情勢に合わせて祭りが変化している点、③どんな時代も人々と共にあり続けたという点である。これらに関して、青森ねぶた祭りとの類似点を多く感じた。

⁹⁾ miru-navi / 観光情報「観るなび」 / 秋田県 / 角館祭りのやま行事の画像より。
(<https://www.nihon-kankou.or.jp/akita/052159/detail/05215ba2212055227>)

2.3 土崎神明社祭の曳山行事

土崎の総鎮守として崇敬されてきた土崎神明社の例祭である。「土崎港曳山まつり」とも呼ばれ、秋田県秋田市の人々に親しまれている。曳山行事の本番は7月20日、21日だが、前後の期間には様々な神事が行われている。歴史も古く、土崎の人々には欠かすことのできない、地域に根付いた行事といえる。

平成9年(1997)12月15日に重要無形民族文化財に指定され、平成28年(2016)「山・鉾・屋台行事」の一つとしてユネスコ無形文化財遺産に登録された。神輿の渡御に合わせて、町内を曳山が巡航する行事である。祭り自体は7月から始まるが、祭典の神事は毎年5月の第1日曜日に行われる。その年、各町内で行われる曳山委員長の「就任奉告祭」で始まる。一方、曳山が奉納される町内では、6月上旬から7月上旬にかけて曳山の「蔵出し」が行われ、そこから曳山制作が本格化する。7月の頭から続々と多彩な神事が続き、祭典の準備が着々と行われていきます。

曳山が運行される、本祭の日程は7月20日～22日。この三日間だけでも、多くの行事が行われていることがわかる。祭りが終わった翌日の22日には曳山は解体され、「昇神祭」が行われる。この後、9月の第1日曜日に行われる「離任奉告祭」を経て、その年の神事が終了する。

祭りの特徴は、なんといっても鮮やかな曳山である。この祭りにおいて曳山は、神が降臨し宿る場所で、祭り終了後に解体することで邪気を追い払うと言われている。一方で、曳山行事は風流の要素を色濃く残しており、山はできるだけ美しく華やかに飾り、観衆の目を楽しませる趣向を凝らしているという。

調査の際に訪れた伝承館で実際私たちも実物を見る機会があったが。伝承館では11メートルを超える高さの曳山が展示されていた(写真2-3)。これは昔の曳山を再現したものらしい。昔はとにかく高さを競って作られており、最高26メートルの曳山もあったそうだ。しかしこれも時代の流れとともに変化し、町の近代化が進んで電線の架線の影響もあって、運行制限がかけられるようになり、現在の曳山は、この展示よりはるかに小さい5メートル以下になっている。



↓写真2-4 「見返し」札のコンテスト



←写真2-3 伝承館に展示されている「曳山」

祭りで観衆の目をぐっと惹きつけるのが、やはり曳山の上の武者人形や裸人形である。通常曳山 1 台につき 2~3 体が設置され、それらは合戦の場面や歴史的な場면을表現していた。現在の制作者は、創業 140 年の越前谷人形店のみとなっている。どの人形を曳山に寄せられるかは、曳山の出来を左右する大切な要素である。

そのほかの特徴として、「見返し」「見返し人形」がある。曳山の裏面には、町内で考えられる世相を反映した、「見返し」と呼ばれる句の書かれた札とそれを象徴する「見返し人形」が設置されている。「見返し人形」は武者人形や裸人形とは異なり、風刺の効いたコミカルな表情が特徴的である。また「見返し」札は川柳になっており、コンクールも実施されている（写真 2-4）。

今回の調査でわかったことは、開催期間期間や人形の在り方は、ねぶた祭りとは異なるものの、曳山を解体することで邪気が払われることや社会情勢に合わせた祭りの変化などの青森ねぶた祭りとの類似点も多いという点であった。

2.4 酒田山王まつり

酒田市は、江戸時代に北前船の交易により栄え、「西の堺・東の酒田」といわれた。酒田祭りは 1609 年から 400 年続く歴史ある祭りである。その始まりは、酒田の守り神である上日枝（かみひえ）神社と下日枝（しもひえ）神社の例大祭であった。昔は山王祭という名称であったという。1609 年に始まった例大祭は、2 つの神社の祭神が山王権現（であることから、「山王祭（さんのうまつり）」）といわれた。もともとは旧暦 4 月の中の申の日に行われていた。中の申の日とは、その月の 2 番目の申の日のことである。現在は 5 月 19 日から 21 日までの 3 日間で行われている。2021 年は新型コロナウイルスの影響により 19、20 日の縮小開催が予定されていたが、開催中止となった。

酒田市では 1976 年に酒田大火と呼ばれる大火が起こっている。酒田大火から 3 年後の 1979 年には、復興を記念し山王祭を酒田市民の祭りにしようと、「酒田まつり」と呼ぶようになったらしい。山王祭ではその年の氏子の代表を当人という。その当人の家のことを当家（頭家）と言い、神を迎える「神宿」を開いた。当家は神事の補佐にあたる責任者を務め、大祭日に関する費用をすべて負担した。当家は経済的な負担が大きいため、当家を 3 回すると家が潰れると言われていた。

酒田まつりには、立派な立山鉾が登場する。題材はその年によって様々で、日露戦争や曾我兄弟が出てくる曾我物語などもある。ねぶたでも曾我物語が題材になることがあるのは知られている。ただし、ねぶたと違い一基で一つの題材ではなく、山・鉾の表面と裏面で描かれるものが変わるのが特徴的といえる。表と裏で全く関係がないものが描かれていることもある。明治末期、1906 年になると市内に電線が張り巡らされ、1908 年の祭りを最後におおよそ 20 メートルもの高さの豪華な山鉾は姿を消した。その後は、立山鉾の巡回ができず、祭りは精彩を欠いていったと言われている。

調査先である山形県酒田市立資料館で、実際にあった立山鉾の掛け軸を見せていただいた（写真 2-5、写真 2-6）。これは明治 40 年「玉鳳画 神宿山鉾の図」である。この写真は表面で、龍宮城と浦島太郎について描かれている。掛け軸には龍宮城と乙姫らしき人物、カメに乗って龍宮城に向かう浦島太郎がそれぞれ描かれている。裏面では収穫の様子が題材にされ描かれている。芳湯一聲（よしかた いっせい）のデザインをもとに、約 17 メートルの

立山鉾が作られたらしい。



写真 2-5 掛け軸表面



写真 2-6 掛け軸裏面

2009 年に酒田まつりは創始 400 年を迎えた。それを記念して当時の 20 メートルを超える大きさの立山鉾が再現され製作された。この山鉾は、青森県五所川原市の「立佞武多」を参考に制作されたという。夜には明かりがつけられ、短い距離の巡行と、展示がされた。この再現された山鉾は、現在も毎年制作されている。

歌舞伎の名場面や中国の歴史伝承などから題材をとるねぶたと違い、酒田まつりの山鉾の題材は様々で規則性がないところが面白いといえる。創始 400 年を記念し製作された立山鉾は五所川原の立佞武多を参考に作られたという。実際に互いが影響していたのかはわからないが、立山鉾の形状や高さなど似ている部分はある、その関係も今後の研究でもっと詳しく明らかにしていきたいと感じた。

参考文献・参考 URL

山形県ウェブサイト、酒田まつり

(<https://www.pref.yamagata.jp/020026/kensei/joho/koho/mailmag/shundayori/sakata.html>)

荘内日報社ウェブサイト (<http://www.shonai-nippo.co.jp/cgi/ad/day.cgi?p=2010:05:12:3405>)

Rico's Room2 ウェブサイト (<http://rico.n-da.jp/e795431.html>)

土崎港曳山まつりウェブサイト／国指定重要無形民俗文化財 土崎神明社祭のやま行事

(<https://tutizaki-hikiyama.com/>)

3 灯籠文化圏調査：岩手・秋田編

佐藤乃愛 久保遥 金澤零治

3.1 調査概要

調査者：佐々木てる 秋元健大 佐藤乃愛 久保遥 金澤零治

調査日：2021 年 8 月 14 日（土）～16 日（月）

調査地：岩手県 花巻市 花巻市立図書館

秋田県 横手市 横手かまくら館

岩手県 盛岡市 盛岡市山車資料館

岩手県 盛岡市 もりおか歴史文化館

岩手県 花巻市 早池峰神社

2021 年の 8 月下旬は新型コロナの患者数が増加した時期であり、調査開始と同時に岩手県にも規制が入り、思ったようには調査ができなかった。それでも図書館、博物館などを訪問し、資料収集を行ってきた。ここでは岩手県花巻市の「大迫あんどんまつり」、盛岡市の神事である「盛岡八幡宮例大祭」、そして秋田県横手市の「送り盆まつり」を紹介する。

3.2 大迫あんどんまつり

「大迫あんどんまつり」は、平成 17 年 3 月 25 日に花巻市の無形民俗文化財に指定されている、地元の有名な祭である。「大迫あんどんまつり」は、およそ 200 年の歴史を持つ大迫のお盆の伝統行事である。この祭りは、江戸時代の天明（1781～1788 年）・天保（1830～1843 年）と打ち続いた大飢饉で餓死した人々を供養するために始まったと伝えられている。その始まりは、大迫の僧侶が信徒（しんと）の若者と図り、施餓鬼供養（せがきくよう）として、あんどんを手を持ち引き回ったことや、天明時代の飢饉で亡くなった人々を弔うために始まったといわれている。なお、現在の形である大八車（だいはちぐるま）に乗せて運行するようになったのは、明治頃といわれている。

「大迫あんどまつり」で登場する山車は、南部風流山車の南限ともいわれ、武者絵や歌舞伎の題材のほか、先祖供養の仏画などが郷土色豊かに描かれた大きな「あんどん」で飾られている。当日は、各地区の若者が中心となり、高さ約 5m の山車 4 台が「ヤーレ、ヤーレ」と町内に繰り出し、沿道では大勢の人々がこれを迎えます。

かつては、8 月 14 日～16 日の 3 日間山車が運行され、毎日出し物を作り変えて曳き出していたが、現在は中日を休み 14 日、16 日の 2 日間運行するようになった。間に一日休みを挟む理由としては、14 日と 16 日では違うあんどん山車が作られるからであり、中一日で作り変えるらしい。

地元地域の人々は、子どもの頃は曳き綱を曳いたり、太鼓を叩いたりして参加し、成長するにつれて次第にあんどん作りに参加していく。若者を中心に受け継がれていく「絵師」は子ども達にとっても憧れであり、過疎が進む町の希望でもある



↑写真 3-2 登場する山車¹⁰

←写真 3-1 ポスター¹¹

3.3 横手の送り盆まつり

横手の送り盆まつりについて、秋田県横手市にある横手かまくら館を訪問し、資料収集を行ってきた。まず送り盆まつりは8月16日に「送り盆行事」が行われ、この送り盆行事は県の無形文化財に指定されている。これは観光行事というよりは地元の行事といえる。元々は死者を供養するために1733年頃の大飢饉のときに、現在の中央町であった柳町町内が屋形船を作り川原から流し供養したことが始まりとされている。この行事は江戸後期の段階では恒例の行事となっていたという。



(写真 3-3 ぶつけ合い¹²)



(写真 3-4 制作中の屋形船)

送り盆行事として8月16日には「屋形船繰り出し」が行われます。その際に使われる屋形船は、重さ約750kg、長さ約7.5mあり、屋形船を繰り出している各町内の男性の方々、横手衆といわれる人々によって担がれ、蛇の崎川原へ繰り出し御霊を送る。現在は、合計13～14の町内が屋形船を繰り出しているという。川原で供養を済ませた後、サイサイ囃子と

¹⁰ 写真：まきまき花巻 北山公路花巻商工会議所 HP より

¹¹ 写真：花巻商工会議所 一般社団法人花巻観光協会 HP より

¹² 写真：横手観光協会 HP より

共に川原から蛇の崎橋に上がり、迫力のある船同士のぶつけ合いを始める。この時、背後に横手城がある横手公園から花火が打ち上げられる。

16日の「屋形船繰り出し」の前日15日は、横手市役所前のおまつり広場という場所で市民盆踊りが開催される。横手地域の町内、団体の約1000人が踊りの輪を作り「横手盆踊り」「横手音頭」「横手どんぱん節」の3曲を踊る。おどりの輪の中には、屋形船が並んでいて間近で見ることができる。

横手市には「送り盆祭」の前に、「ねむり流し」行事もある。「ねむり流し」は送り盆行事に先駆けて8月6日、旧暦の7月7日七夕の行事として行われる。全長約3mの小舟をつくり、各町内の子供たちがそこに願い事を書いた短冊をつけて蛇の崎川原へ繰り出す。ねむり流しは睡魔や災厄を川に流し農作業の安全を祈ったもので盆行事の一連ともいわれている。子供が中心となる行事で、この行事に関わった子供たちが将来、送り盆行事の担い手となる。

3.4 盛岡八幡宮例大祭

盛岡秋祭りは、毎年9月14日から16日まで開催される祭りで、宝永6年(1709)、南部藩の街造りの完成を祝い、若衆が町のシンボルである丁印を八幡宮に奉納したのがはじまりと伝えられている。盛岡秋祭りでは、歌舞伎や歴史上の名場面を飾り付けた各町内の山車10台余が豪華さを競い合う。

盛岡山車は、風流山車の製作技法や、「南部木遣」という独特の調子に乗せて謳い上げる山車音頭などが評価され、昭和60年に「盛岡八幡宮例大祭の山車行事」として市の無形民俗文化財に指定されている。主な参加団体は、各町の消防団で、その他にも同好会などが参加する山車行列となっている。

京都祇園祭りや江戸三社祭が起源と考えられ、江戸時代にそれらの影響を受けて祭りが始まったといわれている。当時は、盛岡城下の23の街がそれぞれで制作し、山車の高さや豪華さを競いあっていたといわれている。



(写真 3-5 明治期の復元山車)



(写真 3-6 現代の山車)

存続の危機を迎え、運営が班から南部火消と呼ばれていた消防団になった。明治中期までは、高さを競い合っていたが、電線や高架により、高さが制限されてしまったことにより、それまでのように高さを競い合うことはなくなっただろう。それでも、当時は現在よりも個性的な山車が運行されていたと言われている。

昭和、平成には、「天・人・地・海」（写真 3-6 参照）の法則が定まったと言われている。また、戦前と戦後で、山車に違いが見られ、戦前は、明治・大正の流れを組んだ張子細工が使われているが、戦後には、あまり見られなくなっている点や、戦後は、歴史上の名場面や歌舞伎の名場面が多く題材として使われるようになっているという点が特徴的である。

参考文献／参考 URL

「イーハトーブの一番星をめぐる花巻の旅」 岩手県花巻市一般社団法人花巻観光協会の HP (https://www.kanko-hanamaki.ne.jp/event/event_detail.php?id=45)

「大迫あんどんまつり」まきまき花巻のページより。市民ライター北山公路 (<https://makimaki-hanamaki.com/1908>)

「あんどんまつり」花巻商工会議所 一般社団法人花巻観光協会 HP (<http://hina.hanamaki-cci.or.jp/andon.html>)

横手観光協会 HP：「お祭りイベント」横手の送り盆まつり - 一般社団法人 横手市観光協会 (yokotekamakura.com)

旅東北：横手の送り盆まつり（秋田県横手市）：横手の送り盆まつり（秋田県横手市） | 旅東北 - 東北の観光・旅行情報サイト (tohokukanko.jp)

4 灯籠文化圏調査まとめ：青森ねぶた祭を中心に

秋元健大 佐々木世奈 神なぎさ

ここでは青森ねぶた祭について、ゼミや調査で学んだことを2つの視点からまとめておく。第一に他の地域との共通性としての民俗行事、すなわち「眠り流し行事」の側面である。この点からねぶたの成り立ちについて考えていき、他の祭との比較分析もおこなう。次に戦後から現代の青森ねぶた祭の移り変わりをまとめたうえで、将来展望を述べておく。そこでは、ねぶた師、そしてねぶたの技術に注目し、ねぶたの技法や芸術性について述べていく。

4.1 ねぶたの起源と眠り流し行事

4.1.1 ねぶたの起源

まずはねぶたの起源について小松（2016）を参考にまとめておく¹³。青森市での最初の確認は江戸時代の享保年間の1716年から1736年のあたりとされている。場所は油川町付近で、特徴としては弘前のねぶたまつりを真似ていたことや京都の祇園祭の山車に似ていたという点からねぶたの起こりは青森市よりも弘前市のほうが先だったと思われる。また民俗行事としての「青森ねぶた祭」の由来については、七夕祭りと習俗・精霊送りが合わさって「ねぶた祭」になった推測できる。そこで次に七夕祭りと習俗・精霊送りについてまとめておく。

4.1.2 七夕祭り¹⁴

まず七夕祭りに焦点を当ててみると、七夕祭りには3つの由来があり、1つ目は棚機と呼ばれる日本の古い禊行事である。これは神様を迎えて秋の豊作祈願や人々の穢れを払うというもので、細かい部分の内容としては若い女性が水辺にある機屋というところにこもって神様のために着物を織るという。この行事は仏教の伝来により後に迎え盆としての性質を持つようになった。2つ目がおおりひめとひこぼし伝説です。これは裁縫の仕事をするといわれている織女星（琴座のベガ）と農業の仕事をするといわれている牽牛星（鷲座のアルタイル）の物語でこの2つの星が旧暦の7月7日に天の川を挟んで最も光り輝くことから、これを見た中国はこの日を1年に1度のめぐり会ひの日としたことで七夕のストーリーができたといわれています。3つ目は乞巧奠というもので、こちらは先ほど織女星にあやかって機織や裁縫の上達を願うという中国の風習で、これはやがて芸や書道の上達も願うものとなります。

4.1.3 習俗・精霊送り

次に習俗・精霊送りであるが、その代表的なものとして「眠り流し」がある。この行事は（旧暦の）7月7日の夜に禊行事として穢れを川や海に流すというもので、具体的には穢れ

¹³ 特段の断りがない限り、主に『増補版 青森ねぶた誌』の小松の論文を参考にまとめた。

¹⁴ 七夕の歴史・由来 | 七夕特集 | 縁結び祈願 京都地主神社のHP 参照

は灯籠を表しており、この灯籠を流して無病息災を祈るというものである。そして、この穢れ・灯籠がねぶたと呼ばれていた。「ねぶた」という語の由来であるが、これは眠りが訛ったものとされている。そのために、青森県では「ねぶた流し」と呼ばれているが、秋田では「ねぶ流し」、足利では「ねぶと流し」、滑川では「ねむた流し」などと呼ばれており、地域によって呼び方や中身に微妙な違いがあることがわかる。多くの地域で眠り流しの言葉があることから、民俗行事としての眠り流し行事が広範囲で行われていたこともうかがえる。

この「眠り流し」について、佐々木ゼミでは柳田国男の「眠流し考」（『年中行事覚書』）を輪読した。ここから考察したこととしていえるのは、眠り流しに込められた意味としては、「ネブタは流れる、まめの葉はとどまれ」という、うたの重要性であった。このうたにあるネブタは睡魔や疫病といった余計なもの・邪魔なものを表す、いわゆる「悪」としての性質を持つ。これに対し、まめの葉は健康や豊作といった、欲するもの、願うものという、いわゆる「善」としての性質をもつものとされる。すなわち灯籠＝ねぶたを流すという行為は、悪いものは外へ流し、善いものは内へとどめようといった意味が込められていることがわかった。

4.1.4 山車の形態

次にねぶた本体の形態について、他の山車との比較でわかった点を述べる。まず先のべたように、ねぶたは灯籠と山車が合わさってできていて、灯籠は眠り流しから、山車は京都の祇園祭からきていると考えられる。ねぶたがどのようにこの形態になっていったのかを考えるため、図4-1のようにまとめた。この図は七夕・お盆・眠り流し・山車の4つの要素をもとに調査先の祭りを分類したものである。これをみるとねぶたは七夕・眠り流しであり、同時に山車という特徴を有していることがわかる。同じようなものとして能代ねぶながしがあるのがわかる。

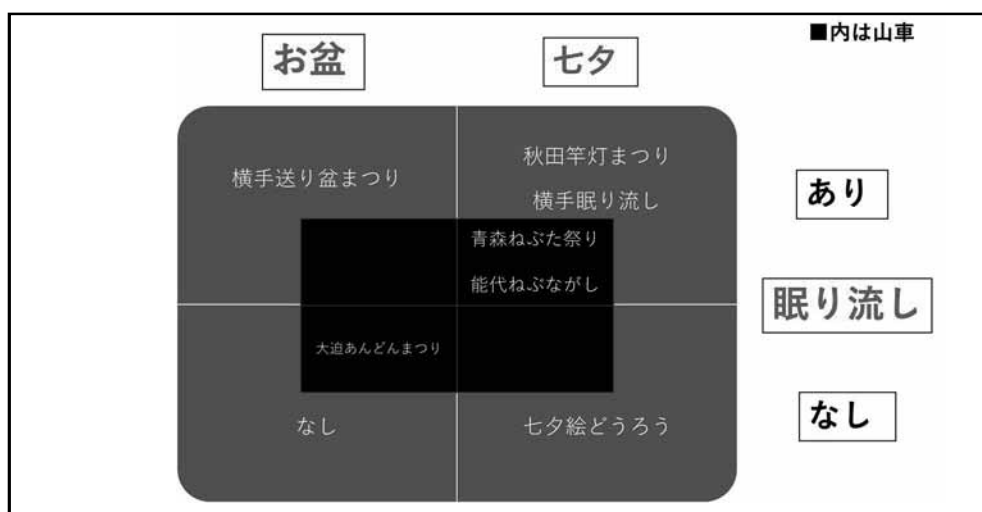


図 4-1 まつりの形態の分類

4.1.5 「能代ねぶながし」と「ねぶた」

そこで続いては能代ねぶながしと比較しながらねぶたの成り立ちを見ていく。まずは1700年代には、青森ねぶたは津軽藩主、津軽信寿による見学や油川での確認、そして、形

態が山車のような形であったことが確認される。また同じころ能代ねぶながしは「代邑見聞録」にて確認されていて、このころは子供を中心に眠り流しが行われていたという。このことから 1700 年代はともに確認された年であることがわかる。

1800 年代の青森ねぶたは 1804 年から 1811 年にかけて大型化が進み、このころには歌舞伎の題材があったことが奥のしおりで確認されている。能代ねぶながしは 1843 年にはねむた流しと称していて、人形化や大型化が進んでいたとされている。このことから 1800 年代は大型化・風流化が進んだという大きな特徴がある。

4.1.6 東北地域の祭礼の起源

能代とは別にその他の調査地の祭りの確認年を整理すると表 4-1 のようになる。花輪ばやしは 1200 年代と最も早い、現在の形になったのは 1800 年代とのことである。1600 年代には酒田山王まつりや角館のやま行事、1700 年代が最も多く土崎港曳山まつりや秋田竿灯まつり、盛岡秋まつりなどがある。

1200年代	・花輪ばやし（ただし現在の形は1800年代）
1600年代	・酒田まつり ・角館祭りのやま行事
1700年代	・土崎港曳山まつり ・秋田竿灯まつり ・盛岡秋まつり etc・・・

表 4-1 調査訪問先の祭の起源比較

これらのことからそれぞれの祭りは 1600 年代から 1700 年代にかけて発祥もしくは確認がされ、山車化もこの時期にすすんでいたことがわかる。そして 1800 年代には大型化・風流化がすすだ。大型化・風流化・山車化がすすんだ要因として、これらの年代に共通する北前船による港の整備や参勤交代による街道・脇往還の整備を通した文化と情報の交流があったからではないか。また北前船には西廻り航路と東廻り航路があり、青森ねぶたのような山車灯籠を考える上では、西廻り航路が重要だといえる。西廻り航路の付近はねぶたに似た祭りが多いことがわかる。例えば、石川県の「キリコ」や富山県の「夜高あんどん」などもそこに分類されるだろう。

内陸側の街道・脇往還についてである。まず旧五街道、すなわち東海道・中山道・甲州街道・日光街道・奥州街道があり、これによって西は京都まで、北は福島の上野までつながっている。そして、この五街道で補えなかった部分が脇往還で補われるようになる。脇往還は仙台松前道、三国街道、山陽道など多くのものがあり、それらが整備されたことで日本全国に交通網が拡大されていった。こうした街道が 1970 年代に徐々に整備されると共に、京都

の祇園祭の影響を受けた、山車文化が東北まで伝搬していったことも考えられる¹⁵。

4.2 青森ねぶた祭とねぶた師

4.2.1 ねぶた祭の変化

民俗行事を起源とするねぶた祭は、戦後少しずつ姿を変えていったといわれている。第二次世界大戦の際、青森市は空襲で焼け野原になり、戦後すぐは祭を行うだけで精一杯であった。しかしながら復興が進むにつれ、ねぶた祭は戦前以上に発展することになる。

青森ねぶた祭の戦後の重要な変化は次の通りである。まず、名称の変化が指摘できる。1958年から、祭りの名称は「青森港まつり」から観光を意識した「青森ねぶた祭」に変化した。次に、材料の変化が指摘できる。材料も竹から針金に変わったことで細かい表現が可能になり、より繊細でダイナミックなねぶたが制作されるようになった。そのため、いかに優れたねぶたを作るかが重要視されるようになり、ねぶたの出来栄が審査されるようになった。ちなみに中の照明も、戦前はロウソクだったのに対し戦後は電球が導入され、現在はLEDが使用されるようになった。さらに、運行する団体も変化してきた。というも経費が高額になったことにより、運行団体は地域から行政や企業へと変化していったのである。

このような形式の変化からわかることは、青森ねぶた祭は徐々に「見せる」ことを強く意識するものになっていったことである。迫力と優美さを兼ね備えるようになった青森ねぶた祭は、仙台七夕、秋田竿燈とともに「東北三代祭」として、観光客の誘致に力を入れ始めることになる。また主催する組織もさらに整備され、ねぶたの他の地域への遠征も積極的に行われるようになる。このような活動の成果で、さらに観光客が増加し、有料観覧席が本格的に設けられるなど、より観光資源としての側面が強まっていくことになった。それによりもともと祭りの担い手であった地域の人々が疎外されてしまうとの懸念もあった。しかしねぶた祭の大規模化は止まらず、やがて毎年二百五十万人を超える観光客と莫大な経済効果をもたらす巨大な祭りとなっていった。

4.2.1 ねぶた師の仕事

このような状態から言えることは、最近のねぶたは眠り流しという起源や地域コミュニティの強化といった側面より、観光や収益を重視するものになったということである。祭りが人に見られることを意識して大規模化・観光化するのはいけして珍しいことではなく、悪いことではない。しかし、新型コロナウイルスの流行により、2020年戦後はじめて青森ねぶた祭の中止を経験した私たちは、重要なことに気づかされた。それは、青森ねぶた祭には、ねぶたを制作するねぶた師の存在が欠かせないということである。

青森ねぶた祭の中止は、ねぶた師にとって仕事がなくなることを意味する。ねぶた師は制作によって収入を得ているし、制作が生きがいでもあるため、ねぶた師が受けたダメージは多大なものだったといえる。しかし、ねぶた師や、ねぶた師が持っている制作技術がとぎれてしまえば、青森ねぶた祭は存続できなくなってしまう。青森ねぶた祭という伝統文化とねぶた制作の技術を次世代に受け継ぐために、今後どのようなことが必要になるのだろうか。

¹⁵ Nippon.com の HP / トピックス / 「大名行列が通った道：五街道と脇往還」を参考にした。

4.2.3 ねぶた師の新たな取り組み

そんな中、現在はねぶた師の技術に注目が集まっている。例えば、2020 年冬には「ねぶたアート創成プロジェクト」と題して、青森市役所や浅虫地区のホテルなど、市内 28 か所で 39 のねぶたの技法を用いた作品が展示された。このプロジェクトは、新型コロナウイルスの影響により青森ねぶた祭が中止となったことを受け、ねぶた師に創作の機会を提供すると同時に、夏の風物詩であるねぶたの舞台を冬に移し、ねぶたの新たな魅力を発見、発信しようという趣旨の元、青森市が企画・実施したものである。このプロジェクトでねぶた師が制作した作品を私たち佐々木ゼミも見学に行ったが、その時に子供からお年寄りまで多く地域の方々も展示されている場所へ足を運んでいることに気づいた。

また、ねぶたの技法を用いた作品は他にも、「和紙特性ライト」や実際に運行されたねぶたの彩色和紙の希少な切れ端（ねぶたのかげら）をアップサイクルした照明器具である「KAKERA」など、ねぶた関連の商品も多く発売されている。このように、ねぶた師自身がねぶたの技法を用いて様々な商品を販売することは、彼らの収入源がねぶた制作以外にも広がることになる。その結果、ねぶたの時期以外にも収入が安定して得られ、生活が安定すると考えられる。



写真 4-1 ねぶたアートプロジェクト



写真 4-2 ねぶた「KAKERA」¹⁶

4.2.3 ねぶた師の技術の保存にむけて

さて、収入の面は重要であるが、今回われわれが注目したのは、ねぶた師の収入だけでなく、ねぶた師そのものと技術の保存である。2020 年、2021 年の 2 年間、青森ねぶた祭が中止になったことによる市民の精神的ダメージ、すなわち夏の喪失感は多大なものであったといえる。同時に、青森ねぶた祭りはねぶた師がいなければ成立しないという事に再度気づかされた。すでに指摘したような商品やプロジェクトが発案されたことで、逆にねぶた（技法）の可能性が広がった。これまで当たり前のように見ていた「ねぶた」を形作る技法の貴重さを強く感じた 2 年になったといえるだろう。

そして、これからは、ねぶたの保存もちろんだが、それを制作する「ねぶた師の保存」そして「技術の保存」が重要視されてくると考えられる。ねぶたに捉われず幅広く様々な作品にねぶたの技法が用いられることで、ねぶた師を目指す人以外の多くの人々にもねぶた技術が継承され、技術の保存が可能となり、その作品を通してねぶた師の想いを感じ、その

¹⁶ 「動、静、凜、ブナ、ヒバ」NEBUTA STYLE の HP の画像より

時代を生きたねぶた師の存在が守られる、保存されると考えられる。その意味でも今後の青森ねぶた祭りでは、一層ねぶた師に注目していきたい。

参考文献

- 柳田国男 1955 『年中行事覚書』、現代選書、修道社/青空文庫作成、ファイル (kindle 版)
小松和彦 2018 「第 1 節-ねぶた祭りの基本構造と構成要素」「第 2 節-都市祭りとしての青森ねぶた」「第 3 節-列島の中の青森ねぶた ねぶたの仲間たちを訪ねて」『増補版 青森ねぶた誌』: 2-25
阿南透 2003 「青森ねぶたの現代的変容」『国立民族学博物館研究報告 第 103 集』: 263-298

参考 URL

- 七夕の歴史・由来 | 七夕特集 | 縁結び祈願 京都地主神社
(<https://www.jishujinja.or.jp/tanabata/yurai/>)
ねぶたの由来：青森ねぶた祭 (<https://www.nebuta.jp/know/origin.html>)
【新発田】連載企画『北前船の魅力を訪ねて』（企画振興部）新潟県ホームページ
(<https://www.pref.niigata.lg.jp/site/shibata/kitamaebune02.html>)
大名行列が通った道：五街道と脇往還 | nippon.com、(<https://www.nippon.com/ja/japan-topics/c08604/>)
能代の七夕行事 | 秋田県能代市の伝統文化
(<http://bunka.welcomenoshiro.com/culture/tanabatagyoji/>)
NEBUTA STYLE の HP KAKERA ギャラリー「動、静、凜、ブナ、ヒバ」
(http://nebutastyle.com/gallery/gallery_kakera/gallery_kakera-1.html)

5 灯籠文化圏調査：北海道・岩見沢編

中谷帝虎 平田昂至

5.1 調査概要

調査者：佐々木てる 中谷帝虎 平田昂至

話し手：北海道教育大学 岩見沢校 藤本悠平、遠藤悠也

調査日：2021 年 11 月 20 日

調査地：北海道教育大学 岩見沢校

2020 年に北海道岩見沢市において、ねぶたが運行されるという話を聞いていた。しかもその中心は青森出身の大学生であり、学生自らが資金を調達し、地域ぐるみで「ねぶた祭」を開催するという。残念ながら 2020 年は新型コロナの影響で中止せざるをえなかったが、2021 年にはその形をかえて、実際に制作したねぶたが運行される運びとなった。そこで、灯籠文化圏調査の番外編として、実際どのような経緯でねぶたが運行されることになったのかを調査することとなった。

調査は北海道教育大学岩見沢校で行われ、祭の中心となった藤本悠平氏（以下藤本氏とする）と、協力した学生 1 名に話を聞くことができた。

5.2 岩見沢ねぶたの始まり

調査で話を聞くと、実は岩見沢市では藤本氏がねぶたに関わる以前にも、1995 年から 2005 年まで、約 10 年間地元の祭でねぶたが運行されていたという。そのため今回のねぶた運行の前史をまとめておく。

以前ねぶたが運行されるようになったきっかけ場、北海道教育大学岩見沢校（岩教大）の授業に、当時の教員である進藤貴美子氏、村田文江氏が民俗舞踊の研究を取り入れたのが始まりであったという。その後岩教大の学生が、地元の「あやめ祭」に「荒馬」および「扇ねぶた」で参加した。それがきっかけで、当時の JR で務めていた岩田敏明氏が中心になって、学生も協力しねぶたを制作したという。その後制作場所の喪失、後継者不足などでねぶたが制作できなくなるまで運行されたという。全部で 7 台運行したという。下記はその簡単な年表である¹⁷。

- | | |
|--------|---|
| 1986 年 | 今別町を訪れ、荒馬の講習会へ |
| 1991 年 | 進藤貴美子氏「民俗芸能」、村田文江氏「北海道文化論」開講
：教材にねぶた、荒馬（青森県今別町の祭）を取り入れる。
新篠津青空まつりの聞き取り調査実施。 |
| 1993 年 | 新篠津青空まつり：岩教大の荒馬と JR 運転所の「扇ねぶた」が参加。
岩見沢あやめまつり：荒馬ゲリラ参加、扇ねぶた初参加 |
| 1995 年 | 「岩見沢あやめ祭り」：JR ねぶた&荒馬の競演 |

¹⁷ 年表は調査で頂いた資料をもとに作成した。

→JR 職員の岩田氏らがねぶた制作（ねぶた師、北村隆氏にアドバイスを頂く）。

ねぶた初の登場。

1999 年 進藤先生「学校文化論」：受講生全員、荒馬であやめまつり参加。

またゼミで扇ねぶた制作、まつり参加

2002 年 「岩見沢あやめまつり」→「岩見沢彩花まつり」

に改称。同年ねぶた研究サークル発足。金魚ねぶた制作始まる。

2004 年 岩見沢教育大学が国立大学法人となる

2005 年 進藤先生：「学校文化論」最後の講義。

彩花まつり「荒馬」&「ねぶ研」最後の参加。

2006 年 大学再編

2007 年 進藤先生、2008 年 村田先生 釧路校へ異動。

岩見沢からねぶたが消えていく。



写真 5-1 岩見沢に初めて登場したねぶた¹⁸



写真 5-2 1999 年の様子

重要なことは北海道教育大学岩見沢校の授業の一部として、「荒馬」や「ねぶた」が扱われたことであった。また同時に JR 関係者の岩田敏明氏が中心になって「ねぶた制作」を開始したことである。写真 5-2 は当時のねぶたであるが、その大きさはねぶたまつり本祭に近い、かなり大きなものとなっている。

5.3 岩見沢ねぶた復活までの流れ

藤本氏がねぶたを作ろうと思ったきっかけは、彼自身の「北海道にねぶたがないなんて…」という強いねぶた愛だった。また、藤本氏の所属する北海道教育大学の生徒には、北海道出

¹⁸ 写真 5-1 岩見沢ねぶた プロジェクト document book2020 より

写真 5-2 北海道教育大学岩見沢校学園だより 110 号 1999 年 11 月 1 日より

身の方が多く、青森出身の藤本さんは珍しがられ、かつねぶたを作ったことがあると言うと「いいじゃんやってみよう」という流れになり「岩見沢ねぶたプロジェクト 委員会」が発足されたという。ただこの時点では、藤本氏はまだ過去に岩見沢でねぶた祭があったということは知らなかったという。このことからわかる通り、「ねぶた祭を復活させた」と言われているが、藤本氏はもともと復活させるためにねぶたを制作し始めたというつもりはなく、「自分が作りたいから作った」だけだったらしい。

5.4 「岩見沢ねぶたプロジェクト委員会」発足から 2021 年の開催まで

2018 年に「岩見沢ねぶたプロジェクト委員会」が北海道教育大学岩見沢校、美術文化専攻一学年の有志 38 名 にて発足された。またこの年に初めての作品となる「ヒグマと北海道」が JR 岩見沢複合駅舎 2 階で公開制作された（写真 5-3）。



写真 5-3 ヒグマと北海道¹⁹

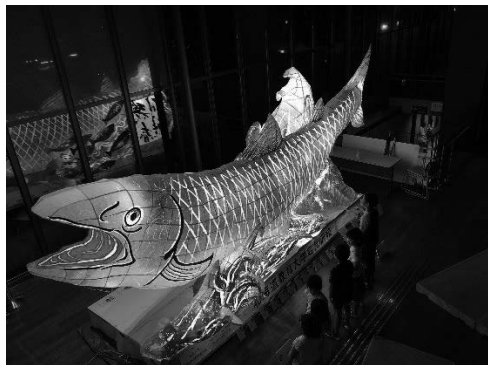


写真 5-4 幾春別川の鮭

翌年、2019 年も、引き続き岩見沢複合駅舎 2 階で公開制作を行い、「幾春別川の鮭」（写真 5-4）をテーマに作品を完成させた。藤本氏はこの 2019 年の公開制作時に、以前岩見沢ねぶたに関わっていた岩田敏明氏をはじめとする、当時のメンバーに出会い、過去のねぶた祭の存在を知ることになる。そしてここから「まちを練り歩くねぶた」の復活を目標にし、活動が開始されたという。

2020 年はイベントに向けてまず資金調達を開始した。1 月、クラウドファンディングにて目標額の 150 万に対して 102%となる 153 万 500 円の支援を得ることとなった。また他には太陽財団や商工会議社からの補助金・助成金など資金を得て、総額 400 万円以上の資金調達に成功しました。しかし、着々と準備を進めるも、新型コロナウイルスの流行に伴いイベント開催を一年延期することになった。そのため 2020 年は充電期間と捉え、祭りに関わる人を増やす活動を行ったという。そしていよいよ、2021 年 10 月 16 日イベントを開催することとなった。「岩見沢ねぶた祭」という名前でイベントを開催し、ねぶた運行自体は 18 : 00 から開始した。「*NEO-NEBUTA*～岩見沢でしか見られない、新しいねぶた運行。『ねぶた』『光』『音』の共演で、新体験の祭りを～」をテーマに計 4 台のねぶたが出陣した。総参加者数 1,800 人となり、無事成功に終わったという。

¹⁹ 写真 5-3, 5-4 はクラウド・ファンディング Good Morning の HP より引用

登場したねぶたであるが、2020年5月から6月にかけて、岩見沢市内の小学校に2021年のまちを練り歩くねぶたの下絵を考える出前授業を行い、下絵コンクールを実施した。コンクールには328枚もの作品が集まった。同年12月から、このコンクールで最優秀賞に輝いた作品をもとに、実際のねぶたの制作が開始されたという。現在、出陣したねぶたは倉庫に管理されている。写真5-5は北海道の鳥「シマエナガ」をねぶたにしたもので、写真5-6は下絵コンクール最優秀賞「野菜がおいしい岩見沢」を題材に、作られたものである。



写真 5-5 シマエナガ



写真 5-6 野菜がおいしい岩見沢

参考資料／参考 URL

パンフレット 岩見沢ねぶたプロジェクト document book 2020

北海道岩見沢市に賑わいをもう一度！「岩見沢ねぶた祭り復活プロジェクト2020」

(<https://camp-fire.jp/projects/view/209311>)

Twitter (<https://mobile.twitter.com/iwamizawanebuta/status/1285446215493025792>)

Facebook 岩見沢ねぶたプロジェクト (<https://m.facebook.com/iwamizawanebuta/>)

岩見沢ねぶた祭 2021－FINAL メインビジュアル公開！

(<https://www.iwamizawa-nebuta.com/>)

クラウド・ファンディング Good Morning、北海道岩見沢市に賑わいをもう一度！「岩見沢ねぶた祭り復活プロジェクト2020」(<https://camp-fire.jp/projects/view/209311>)

第三部 **2020** 年度

クラウド・ファンディング

関連資料

2020 年度シンポジウム

「ねぶた師・文化を救え！！」クラウド・ファンディングを振り返る

日時：2020 年 12 月 12 日

場所：新町キューブ・グランパレ

時間：13：00～16：00

プログラム

司会：今泉清保（A T Vアナウンサー）

基調講演 クラウド・ファンディングについて

READYFOR 担当者：金久保智哉

ねぶた師を救え クラウド・ファンディング経緯と経過、報告

代表：佐々木てる

休憩

クラウド・ファンディングを振り返る

内藤亘（事務局）・後藤公司（アドバイザー）・金久保智哉・佐々木てる

学生の活動と感想

質疑応答

2020 年度公開講座：シンポジウムの様子



公開講座 第7回『ねぶた学』 「クラウド・ファンディングを振り返る」

報告者：青森公立大学 佐々木てる

クラウド・ファンディングが開始されるまで

- 4月8日 ねぶた祭 中止決定
- 4月9日 今泉さんに相談（学祭コラボ企画）
- 4月11日 内藤さんと打ち合わせ
（クラウド・ファンディングについて）
- 4月14日 後藤さんと打ち合わせ
（クラウド・ファンディング協力依頼）
- 4月26日 紹介文、学生写真
- 5月12日 竹浪先生、手塚先生打ち合わせ（返礼品相談）

- 5月15日～ 北村隆・麻子先生、有賀先生、諏訪先生、京野先生、大白先生、内山先生、立田先生、北村蓮明・春一先生、林先生、千葉先生 訪問および打ち合わせ
返礼品の内容説明、最終的な協力依頼
- 5月20日～ クラファン・カウントダウン開始
SNSで拡散。メディア各社にリリース。
5月26日市長への表敬訪問でスタート
- 5月26日 市役所訪問、プレスリリース
10時クラウド・ファンディングスタート
15分で150万突破
NHK、ABA、RAB、ATV、ACTV
東奥日報、読売新聞、毎日新聞、共同通信など
メディアに取り上げられる

プロジェクト公開 5/26 AM10:00 まであと3日！



第一目標支援金額 1,500,000 → 最終目標支援金額 25,000,000 #ねぶた師・文化を守る

青森のねぶた文化を守れ。感動を与えてくれたねぶた師のために

ページをご覧いただき、ありがとうございます。ねぶた師支援プロジェクトです。2020年4月8日、国の重要無形民俗文化財(1980年)の「青森ねぶた祭」の開催中止が決定されました。

「青森ねぶた祭」が現在の形態になった1958年以降はじめてのことです。これにより、ねぶた祭りの主役である人形灯籠の「ねぶた」を制作している「ねぶた師」は仕事がなくなってしまいました。

「ねぶた」を毎年制作することで収入を得ている「ねぶた師」にとって、この状況は失業と同じ意味を持ちます。そしてこの状況が続けば将来的に「ねぶた」の作り手がなくなり、日本の伝統文化である「青森ねぶた祭」自体の存続も危うい状況になってしまいます。

なんとかして、「ねぶた師の方々力になりたい!」。強い思いで立ち上がったのが、ねぶた師支援プロジェクトです。

今回のプロジェクトは、大型ねぶたの制作者全員が参画しています。支援金をもとにねぶたの技法をつかったグッズ、色紙やねぶたの面など、まさに本プロジェクトオリジナル作品を制作してもらいます。これをリターン（返礼品）の一部として、皆様にご提供いたします。

またこのプロジェクトの後、リターン（返礼品）を商品化し、ねぶた師の不安定な経済基盤を継続的に支える環境を整えていくプロジェクトもたちあげていきたいと考えています。

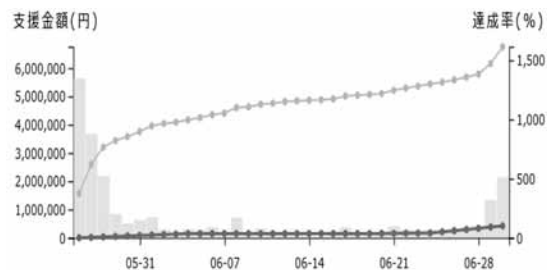
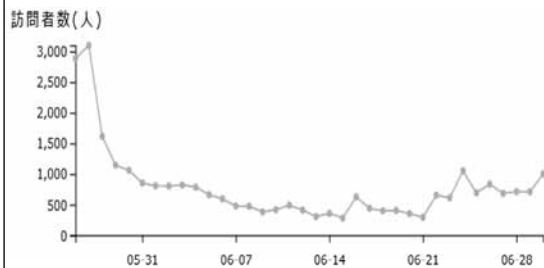
まずはその試金石となる今回のプロジェクトを成功させたいと思っています。皆様ご賛同のほどよろしくお願いいたします！




クラウドファンディングとは、多くの人から少額ずつ資金を集める仕組みです。このプロジェクトでは、ねぶた師の生活を支えるために、クラウドファンディングを活用しています。

ご支援はコチラから
150円から応援可能
150円 500円 1000円 5000円 10000円





スタートダッシュの成功

初期設定：Web上では150万円
目標金額は2000～2500万（ねぶた師一人あたり100万円の仕事依頼）

1日目 563万
2日目 367万2千円
3日目 217万9千円
★3日間で約1150万

最終日 213万3千円
最終合計：24,559,000円（最終目標額：Web上では2500万円設定）

要因：①メディアへのリリースの成功、SNSの拡散
②返礼品の充実度

返礼品紹介

30,000円

ねぶた師描き下ろし色紙

- ねぶた師描き下ろし色紙1枚（幅240mm×高さ270mm）
（どのねぶた師の色紙かは、到着時のお楽しみ！）
- お礼状（返礼品と同送）
- 「VRねぶた祭」内にお名前掲載



50,000円

ねぶた師手作り灯ろう

- ねぶた師手作り灯ろう
 - ・ねぶたの技法を用いて制作した卓上サイズの灯ろうです。
 - ・14名のねぶた師が2つつつ制作します。
 - ・LEDランプ、家庭用電源使用
 - ・どのねぶた師の、どんな作品かは、到着時のお楽しみ！
- お礼状（返礼品と同送）
- 「VRねぶた祭」内にお名前掲載



100,000円

ねぶた師手作りねぶた面（小）

- ねぶた面 サイズ中
（サイズ約 高さ 36cm x 巾 26cm x 奥行11cm）
・ねぶたの技法を用いて制作した壁掛けのねぶた面です。
- ・14名のねぶた師がそれぞれ1体制作します。
- ・どのねぶた師の作品が届くかはお楽しみ！
- お礼状（返礼品と同送）
- 「VRねぶた祭」内にお名前掲載





ねぶた師手作りねぶた面（中）

- ねぶた師制作 ねぶた面
- サイズ大（サイズ約 高さ 60cm x 巾 47cm x 奥行 30cm）
- ・ねぶたの技法を用いて制作した壁掛けタイプのねぶた面です。
- ・14名のねぶた師がそれぞれ1体制作します。
- ・どのねぶた師の作品が届くかは楽しみ！
- お礼状（返礼品と同送）
- 「VRねぶた祭」内にお名前掲載



300,000円

ねぶた師全員の描き下ろし色紙

- ねぶた師が描き下ろした寸松庵サイズの色紙14名分を一つの額に表装します。ロットナンバー付き
- お礼状（返礼品と同送）
- 「VRねぶた祭」内にお名前掲載



活動経過

- 6月1日 竹浪先生・手塚先生訪問 千葉先生訪問 撮影
FMラジオ収録 京野先生訪問 撮影
- 6月2日 河北新報訪問
ビデオ撮影練習会
- 6月3日 立田先生、林先生、内山先生訪問 撮影
- 6月4日 お祭り J A P A N取材
京野先生訪問 A B A取材
- 6月5日 北村麻子先生、隆先生訪問 撮影
ビデオ編集作業
- 6月8日 ラジオ収録（近藤金吾さん）
有賀先生訪問 撮影





6月9日 ラジオ収録 FMバード
6月10日 諏訪先生訪問 撮影
6月11日 返礼品追加
6月12日 北村春一先生、蓮明先生訪問 撮影
6月18日 市長訪問 ラジオ

Youtube 配信 6月6日よりスタート6月18日まで
ねぶた師毎日1名メッセージ送信
6月20日 小野寺市長のメッセージを掲載

6月24日よりカウントダウンスタート

6月28日 スーパーJチャンネルA B A特集 (youtube配信)
6月30日 22:30より ライブ配信 カウントダウン
ゼミ生全員集合 市内イベントハウスを貸し切りライブ配信を行う。



その後の動き

7月～11月

返礼品の受け取り

10000円以内の返礼品の送付・色紙の送付（事務局）

面中の受け渡し

オンライン夏祭り参加。週刊金曜日掲載。

浄土宗広報誌「かがやき」掲載。

その他多数のメディアで紹介していただいた。

7月28日 ねぶ師さんへの報告会



まとめ

苦労したこと

- ・学生を連れて、運転手として走りまわった
- ・応援コメント1300以上すべて返信
- ・メディアへの対応 すべてに対応した
- ・すべてのねぶた師さんに個別に訪問し、説明をおこなった

よかったこと

- ・ねぶた師の皆さんが喜んでくれた+知り合いになれた
- ・ねぶた祭の宣伝ができた
- ・学生が楽しそうだった。ゼミ活動が活発化した。
→成長した実感がもてた
- ・副次的な効果として、ねぶた関係者を元気づけることができた
- ・ねぶたの知名度が非常に高いということに、改めて気づかされた。
- ・地元メディアの方々と協力することができた。

終わってからの感想

来年こそは「青森ねぶた祭」に参加したい。

返礼品をすべてお手元に届けて事業終了

→決算を公開する予定

ご清聴ありがとうございました

クラウド・ファンディング支援者コメント	
オマツリジャパンの告知をみてきました。 再開を楽しみにしています！！	
来年、げんきにねぶた祭りに参加したいです。ねぶた師の皆さんもコロナに負けないでください。	
青森市出身です。この夏、自分も子どもの時以来で我が子にねぶたを見せようと楽しみにしていた矢先に残念です。ねぶた文化保全のため、またこのプロジェクトを行っている学生さん達が自分達の行動が今後何かを変える力になることを学ぶ役に立てれば幸いです。	
昨年次男がねぶた祭りに参加してとても楽しませていただきました。準備は1年がかりで大変なものですし、無くなってほしくない祭りなので、微力ながら応援させていただきます。VR も楽しみです、来年の開催も楽しみにしています。	
大迫力のねぶたが直接見られる日が来ることを応援してます！	
ねぶた（ねぷた）の期間に青森に行ったことがないのですが、いつか見たいと思っているので、なくなってほしくないと思って応援させていただきました。がんばってください。	
ねぶた、毎年楽しみにしてます。ねぶたがない夏なんて寂しすぎる。来年は素晴らしいねぶたにまた会えると信じています。待っています！	
青森ねぶた大好きです。ずっとずっと続いていきますように	
青森出身で、ねぶたは故郷のお祭りです。来年こそ、どうか開催できますように！	
青森に住んでいた当時ねぶた祭をはじめ、商店街の皆様にも大変お世話になりました。来年のねぶた祭楽しみにしています	
来年のお祭りを楽しみにしています。家族みんなで応援しています。頑張ってください！	
その昔、代表には大変お世話になりました。受けた御恩に少しでも報いることができれば幸いです。	
また夏の青森で拝見できるのを楽しみにしています！	
今は東京ですが青森で生まれて青森で育ちました。正直、ねぶたがないのは青森県民として寂しさしかありません。少しでもねぶた師さんの支えとなればと思い支援させて頂きました！	
1983年に初めて栈敷席で観たことを、思い出します。応援しています。	
小平市の学生寮でのねぶた祭運行が懐かしい思い出です。もう30年も前ですが。	
まだ青森の地へは行ったことがありませんが、テレビなどを通じてねぶたの荘厳さに魅力を感じています。再び自由に行動ができるようになった後は、必ず青森へ遊びにいき、願わくばこの目でねぶた祭りを見たいと思っています。大変な状況かとは思いますが、この困難を乗り越えて、これからも素晴らしい伝統を未来へ引き継いでいってください。	

ねぶた大好きです！ずっと応援しています♪
来年のねぶた祭りを楽しみにしております。頑張りましょう！
世界的有名な青森ねぶたの 伝統文化が未来永劫残りますように
伝統文化の継承の為頑張りましょう
ねぶたが中止になることがあるなんて！青森の方たち、力を落とさないで、頑張ってください！
ねぶたは青森市民の魂！ねぶたの迫力に圧倒し、ねぶた囃子で心も燃える！ 青森の夏はねぶたが無いと寂しいので、来年こそは開催されますように
来年を楽しみにしています
毎年夏を彩って下さっている分、次は私たちが応援します！
素晴らしい取り組みありがとうございます!!応援します✦
県外の知人にも応援をお願いしてます。 ねぶた師のみなさん、頑張ってください！
ニュースでこのクラウドファンディングを知り、すぐに検索しました。 素晴らしいねぶた師の方々、微々たるものですがお役立てください。 来年の夏を楽しみにしています。
ケッパレ！ワモ、ケッパル！
今年は、寂しい夏です。来年のネブタ楽しみにしてます。
人生の多くをねぶたからもらってきました。ささやかでもご恩返しになれば幸いです。
心躍る勇しく美しくねぶたに再会できる日を心待ちにしています！
どの業界も大変なのは間違いありませんが、ねぶたの火だけは消してはなりませんね!!応援しております
糧は少しですが、想いは熱烈応援します。
1度もねぶた祭りに行ったことが無いのですが、いつか行ってみたいと思っていたので、今回支援させて頂きました。ねぶた師のみなさんがまたいつか素敵だねぶたを作ってくださいのを楽しみに待っています。
陰ながら、ささやかながら支援させていただきます。
今年ねぶたが行われないことは大変残念です。来年史上最高の盛り上がりになるよう全力で応援します！
満額達成まであと半分！応援しています！
青森と地縁はありませんが、ねぶたを見て、そして跳ねて、虜になりました。もうそれなりの歳ではありますが、皆様の作ったねぶたの前では是非もう一度跳ねたい！そういう気持ちを含めて支援させていただきます。
大変な状況だと思いますが、またねぶたが開催できる日を楽しみに待っています！ 頑張ってください！

移住者ですがねぶた大好きです、微々たる金額ですがご支援させていただきます。ねぶたは青森の SOUL だと思っています！頑張ってください！！
様々な催しが中止・延期になり、多くのかたが仕事を失っています。私も不安な日々を送っています。でもだからこそ、いま、ねぶたが私の心を支えています。必ずや再び、ねぶた祭りが出来ますように。その想いが明日への活力です。私たちには、ねぶた祭りが必要なんです。生きていることの祝祭です。ねぶた師のみなさまには今後も、魂ゆさぶるねぶたを創り続けていただきたく、ささやかではありますが支援させていただきます。
プロジェクトが成功して来年は盛大に祭が開催できるよう祈っています。
私も毎年ねぶた祭に関わっているので、祭の中止は非常に残念です。 今回のクラファンで少しでもねぶた師の皆さんのお役に立てれば嬉しいです。
無くしてはならない伝統文化です！郷土の誇りです！ねぶた師の方々、頑張ってください！
毎年ねぶた楽しみにしていました。つらい時だとは思いますが、明けない夜はないですので、来年最高のねぶたに会える日を楽しみにしています！！
祭りの火を絶やさず。一緒にがんばりましょう！！楽しみにしております。
青森市在住です。来年のねぶた祭りを心待ちにしています。
家族で応援しています、頑張ってください！
いつかは家族で足を運びたいと思っております。素晴らしい文化・伝統が、いつまでも継いでいかれますように。
困難な時ですが、世の中を力強く照らすねぶたの灯りを絶やしたくありません。みんなの力で乗り越えましょう！応援してます！
ねぶた師の皆さんは青森市民の誇りであり宝です。子供達にとっては憧れのヒーローでもあります。来年の祭りに、また笑顔で会えることを祈って、少しですが支援させていただきました。応援しています！
残念ながらまだ見たことがありません。ぜひ現地でねぶたを体感したい！ ねぶた師みなさんを心から応援します！
今年は青森で跳ねられませんが、再開したらすぐ行きまーす！
転勤で青森に来て 5 年目、ねぶた祭りを見て感動し毎年楽しみにしておりました。このような状況乗り越え来年はねぶた祭りが開催できる事を楽しみに待っています。応援しています！
ねぶたで育ち、ねぶたは無くてはならないものです。大変な状況ではありますが応援しています。
できることは少ないですが、情報拡散等、諸々、微力ながら協力できればと思います。何かありましたらお申し付けください。

青森最大のエンターテイメントの祭典にかけるねぶた師の情熱に青森県民はみんな心を動かされています。微力ながら応援させていただきます。
ねぶた大好きです！来年を楽しみにコロナ乗り切りましょう！ねぶた師さんケッパレ！！
ねぶたの火を将来へつなげましょう！
大事な人の故郷のお祭りなので守りたいと思いました。 道は険しいかも知れませんが、どうぞ何とか踏ん張って下さい。
青森出身です。毎年楽しみにしていたねぶたが中止になって残念ですし、地域経済も心配です。素敵な支援を立ち上げていただきありがとうございます。応援しています！
青森出身です。今帰省できない状況ですが、故郷の支援をすこしでもさせてください。
実際のねぶたを観に行きたいと考えておりますし、今後も少しでも協力できたらと思っています。皆様、お身体ご自愛下さい。
来年のねぶた祭りに期待しています。
青森の夏まで 428 日。始まりの花火の音が楽しみです。
今はいつもより長めの冬。来年には今以上の大輪の花が咲くでしょう。けっばれ青森ねぶた！
ねぶた祭りが中止ということで非常に残念でした。それと同時にねぶた師の方々の顔が私の頭に浮かびました。私は弘前大学在学中にねぶた師の方々にインタビューをし、卒論を書き上げました。ねぶた師の現状、生活、意気込み、熱意を知りました。また、ねぶた師の方々と直接お話ししたことで、大好きなねぶたについて、もっと考えるようになりました。そんな中でのクラウドファンディング。支援しないわけにはいけないと思い、微々たる金額ですが、ねぶた師のために何か力になればと思い支援しました。ねぶた師のために、ねぶた祭のために、そして青森のために出来ることはなんでもします！ ねぶた師の皆さん、来年のねぶた楽しみにしています！青森のために熱意を絶やさず頑張ってください！いつまでも応援しています！
古坂大魔王さんが Twitter でお知らせしていましたので、そこで知りました！ 毎年、観に行かせていただいています。 今年のねぶた祭りが中止になったのは残念ですが、再開出来る日に向けて出来る限りの支援をさせていただきます！ねぶた祭りや青森県のお祭りや文化を守りたいですね！
今は青森を離れて暮らしていますが、去年久々にねぶた祭りを観に行き懐かしさと楽しさを感じました！来年以降ねぶた祭りが再開された時にはまた行きたいと思います！ それまではねぶた師や関係者の皆さんのことを応援します！けっばれ～！！
青森出身です。横浜在住ですがねぶたは例外なしに帰って囃子隊で参加してました。今年もそうするつもりだったのですごく残念で仕方ありません。 微力ながら力になれば幸いです

来年のねぶたは2年分いえ、それ以上の盛り上がりになりますね！ 今は我慢する分、お楽しみ貯金してと思っています。 ねぶた師の方々には試練の時かと思いますが、ねぶたを楽しみにしている世界中の多くの人たちのためにも希望の灯りをともし続けて頂けたらと思います。 ぁラッセラーラッセラ!!
毎年ねぶたを楽しみにしています。いつも楽しませていただきありがとうございます。一緒に乗り越えましょう！！
少しですが力になれば嬉しいです♪やっぱり青森の血が流れているのかな☺来年は開催できるようお祈りしています！
大好きなねぶたの力になれるのはとても嬉しいです。今は青森に住んでいませんが、神戸から応援してます。
青森ねぶた祭が未来永劫に続きますように！素敵なおプロジェクトありがとうございます！
小さい頃から、ねぶたを楽しませてもらってきました。パワーをもらっていました。また青森の夏を彩って下さい。
毎年素晴らしいねぶたを作って下さりありがとうございます。来年も楽しみにしてます。
毎年、夢を与えてもらっています。来年、魂のこもったねぶた楽しみにしています。
ねぶたの無い夏が来るなんて思ってもいませんでした。ねぶたバカとして、余りもつらいです。ただそれ以上につらいのがねぶた師の皆さんだと思います。 このプロジェクトに大いに賛同するとともに、ほんの微力ではありますが、ご支援させていただきます。また次の夏に素晴らしい作品が見れることを祈ります。
ワラッセで初めてねぶたを見て迫力と彩りに感激し、今年は初めて生のねぶた祭りを観に行くぞ、と思っていましたが残念なところです。大変な状況かとは思いますが頑張ってください！
今年も楽しみにしていて、この気持ちをどこにぶつけたらいいのか、、、 今仙台いますが、来年は今年の分も爆発しましょう！！ 後世に残るねぶた期待します！！
今年の青森ねぶたないけれど、青森ねぶたスピリッツは健在です！ 次の笑顔のために頑張っていきましょう！
毎年ねぶた祭りを楽しみにしていましたが、今年は開催できずとても残念です。来年以降青森の夏がまた元気に訪れるよう、応援しております！
応援しています！来年のねぶた祭を楽しみにしていますので、頑張ってください！
素晴らしい応援団だと感激しました!!頑張りましょう♥
同級生がねぶた師です。ささやかですが、応援させてください。

妻の地元が青森で、ねぶた祭りを見に行ってます。あの迫力とねぶたの繊細さと大胆な所がとてもすばらしいと思います。また見に行きたいと思ってますので、支援させていただきました。みなさんも体に気をつけ、がんばってください。
青森が大好きです！ねぶたが大好きです！今年開催できない分のパワーが来年に増強されるのかと思うと、今からとても楽しみです。楽しみすぎて涙が出てきます！
大阪からです。私は青森ねぶた祭が大好きです！ 私の一年のなかで最大の楽しみであり、励みです。なので今年は行けなくなって、本当にかなしい... なので、いつもありがとうございます。感謝の気持ちも込めて。皆様、応援してます！どうかお身体に気をつけて頑張ってください！
今年は残念でした。3月に青森行った時はアスパムの裏でねぶた小屋を建てているところでした。中止になるなんて😭世界一の芸術だと思っています。 少しですが応援させていただきます。
アニメ KING OF PRISM でねぶた祭りに興味を持ちました。 青森の人にとって大切なお祭りなんだと思います、存続に向けて頑張ってもらいたいです。 私も実際見たことはないのですがいつか現地で見てみたいです！
大きな成果を期待しています。がんばってください！
支援プロジェクトを立ち上げて下さりありがとうございます。私はアニメ作品（KING OF PRISM）をきっかけに青森とねぶたに惹かれ、これまで何度か青森を訪れておりましたが、昨年ついにねぶた祭りへの初参加が叶いました。目の前で躍動する山車の迫力、一体となって跳ねる高揚感は忘れられません。この素晴らしい文化存続への願いと担い手の方々への感謝を込めて、微力ながら支援させていただきます。来年もその先も、また参加できることを楽しみにしています。
青森産まれの都内在住者です。 様々な方が今回のコロナの影響を受ける中、ねぶた師たちの生活がどうになってしまうのか、気にかけておりました。こうした機会を設けて頂いたことに、率直に感謝を申し上げます。
ねぶたはなくしたくありません！微力ですが、支援させていただきます！
青森出身ではないですが青森ねぶた祭りが高校の頃から大好きです。何度も見に行きました。応援しています。
大学時代はお世話になりました！この活動みてとっても嬉しくなりました！！ 元ミスねぶたとして私からも周りに広めてこのプロジェクト絶対成功出来るように広めますね！！青森の文化を守るためにみんなで力を合わせて頑張っていきましょう！
再開された際にはぜひ現地で参加させていただきたいです。応援しています。

ねぶた祭りを青森で見た時の感動は忘れられません。いつまでも祭りが続きますよう、願ってやみません。いつかまた青森でねぶたを見たい。 新型コロナの影響で、みんな辛い状況が続きますが、一緒になんとか乗り越えていきましょう!!
青森ねぶた祭の開催を楽しみにしています！ プロジェクトの成功と来年の青森ねぶた祭が無事に開催できることを願っています！
香賀美タイガくんのファンなので支援させていただきました！ いつか、跳ね人としてねぶた祭りに参加したいです！
幼少期は祭りがあって当たり前、学生時代は製作や囃子で参加させていただき、長野県へ就職してからは関東圏やLAのねぶたに参加させて頂いてました。ねぶたは私のDNAに組み込まれています。鈴の音がシャリンと鳴れば、全身の鳥肌が立ちます。 どうか、この祭りが未来永劫続きますように、私の子供も跳ねることが出来ますように。そう願うばかりです。一緒に頑張りましょう！
ねぶた大好きだから少しでも応援したいです。頑張ってください〜！
2歳間近だった子どもが初観戦した昨年のねぶた祭り、恐がると思っていたらなんと、今日までビデオで数えきれないほど繰り返し観るくらい大好きに！ 昨年のねぶたの題目は全て覚えている3歳間近のわが子、そして親 笑 ねぶた師のみなさんががんばって！！
関東の人間ですが、青森の文化や青森の人たちが大好きです。またねぶた祭に遊びに行ける日が来ることを願っています。頑張ってください！
青森ねぶた祭は日本の大切な祭。私の心の中で大きな存在です。 はるか大阪からではありますが、青森ねぶたを応援しております。
毎年夏は、東北の祭りに行き元気をもらっています。今年も祭りはないけど行きますよぉ〜♡
青森ねぶたを見ることが毎夏の楽しみになっています。今年は残念ながら見る事ができませんが、今後も素晴らしいねぶたを後世に残してってください。応援しています。
青森ねぶた祭が生きがいで、生まれてから、ほぼ毎年青森ねぶた祭を観に行っている埼玉に住む者です。ねぶた自体が好きなので、ねぶた師を応援し続けます。 ねぶた製作を辞めるなんてことは、絶対に考えないでください。
青森市出身です。ねぶたがないのは考えられない 一夏を みんなで乗り越えましょう！がんばれー！
みんなで力を合わせてがんばってのりきりましょう！
この色紙は現地のレストラン内に飾ります。日本の文化を守る皆さんの心意気を現地でも感じてくれることでしょう。
佐々木先生、後藤さん、この度は大変素敵な企画をありがとうございます。微力ではありますが

ですがお手伝いさせていただきます。今年は、ねぶたはありませんが、この災いを一緒に跳ね飛ばしましょう。
林広海先生の活躍を楽しみにしています。今年は残念ですが、来年に向けて、構想を温めて下さい。
毎年楽しみにしています。中々地元に戻れませんが、ねぶたを含め青森がいつも恋しいです。
ねぶた中止、とても残念です。小規模でも、子ども対象でも開催して欲しいのが本音の願いです。来年楽しみにしてます。
こんな大変な時期ですが、これ乗り越えて来年は素晴らしいねぶた祭りを迎えられることを願ってます！
これからも微力ではありますが応援したいと思っております。 頑張ってください！
今年はねぶたに出れないけれど、頑張って笛を覚えます。みなさん、頑張ってください！ (望愛と慧哉)小学3年生と1年生
ねぶた祭り大大大好き♥北村隆先生のねぶたが特に大好きです！毎年前夜祭から最終日まで毎日が感動で今年ねぶた祭りが無いのが心に穴が空いた感じになりました。 でも来年のねぶたは更に感動できると思います！プロジェクトを発起してくださった方や関係者の方々に感謝です！ ラッセラ〜ラッセラ〜！
青森の夏にはねぶた祭が必要だー。ねぶたを観ながらのビール最高！応援していますので是非頑張ってください！
来年のねぶた祭りを楽しみにしていますね！乗り越えていきましょう！ 微力ながらも応援しています。
過去に私が所属していたゼミの先生や後輩のすばらしい働きかけに感銘を受けました。 と同時に誇りにおもいます。これからもねぶた祭りの火が消えないことを祈って微力ながら支援させていただきます。
1度生でねぶたを見て以来ハマりました。また見に行きたいと思っていたのに今年は残念で仕方ありません。来年の為にもねぶた師の方々には頑張って制作活動をして欲しいと思います。このコロナに負けず、来年も躍動感あるカッコイイねぶたを制作して私達を感動させて下さい。応援しています。
ねぶた大好きです。
青森大好き。ねぶたもっと大好き ねぶた師さんのおかげ。いつも元気を「ありがとう！」 応援してます。

青森の伝統を絶やすことなく、永遠に受け継がれていくことを願って・・・・・・・・。
ねぶたとの出会いが自分の人生の大きな転機でした。 これからも、多くの人に感動、元気を与えてくれるねぶた祭りが続いていくことを祈ります。 来年こそは多いに盛り上げましょう！
初めてねぶた祭りの無い年となりましたが、来年は今年の方も挽回するほど熱のある祭りになることを願って応援させていただきます。
いつも応援してます✧けっばるべ(´▽`)/～
来年は今年の方も合わせて盛り上がるように祈っています！
素晴らしい企画です。目標達成されることを願っています。 来年こそはねぶた祭が開催できると信じて、生きていきましょう。
いつもねぶたを見ると心が弾みます。 ねぶた師の皆さん、頑張ってください。
子供の頃から、ねぶた囃子を聴くと、わくわくしていました。(じゃわめぐ) ずっと残しておきたいお祭りです。大変な時ですが、頑張ってください。ほんの気持ちですが、皆も同じ気持ちだと思います。 来年の素敵なねぶたを楽しみにしております。 多くの支援が受けられますように！
青森に在住の転勤族です。わずかな額ですが応援させて頂きました。
3歳からずっとねぶたが大好きで、ねぶたと共に生きてきました。青森に生まれてよかったと誇れるお祭りです。そんなねぶたを作ってくれるねぶた師さんを尊敬します。けっばりましょう。来年新しいねぶたに会えるのを楽しみに。
今年のねぶたで使う予定だったお金を寄付させていただきます。 私たち市民はねぶた師のみなさんに毎年お金にかえられないくらいのワクワクや感動をもらい、大切な友人や家族に会う機会をもらい、つらい日々を乗り越える希望をもらっています。来年のパワーアップするであろうねぶたを楽しみに、今年は耐えて、そしてみなさんを応援します！
迫力のある青森ねぶた祭。今年は中止ですが、来年以降また楽しみにしています！
ねぶた祭が中止になるなんて、そんなことがあるなんて、思いもよりませんでした。ねぶた師の皆さん、来年に向けて頑張ってください！そんなことしか言えない。けど、とにかく、来年楽しみに待ってるはんで、けっばれー！
ねぶたは希望です！応援しています。
地域文化を守ることは、大切なことですね。微力ながら、応援させて下さい。 コロナウィルスで、大変な状況の方達が沢山いらっしゃいます。 皆んなで力を合わせましょう。頑張ってください！

今でこそ、他県で暮らしていますが、生まれてから大学卒業まで暮らした青森は今でも大事な故郷です。青森公立大学卒業生としても、プロジェクトに参加することでわずかでも貢献したいと思いました。来年は、再びねぶたの灯が灯りますように！
九州は福岡出身、35歳男です。転勤のため青森に来て2年目、昨年初めて妻と1歳の娘とねぶた祭りを拝見させていただき、これまでにない衝撃、感動を味あわせていただきました。その後、ねぶた学など受講させていただいたり、ワラッセに何回も行ったりと、たっぷりハマっております。 そして今年のねぶた祭りには実家の親も招待し家族皆で見ようととても楽しみにしておりましたが、コロナという未知の感染症のため中止となったことが、とてもショックでありました。 ねぶた師の皆様、このような状況下とても大変かと思いますが、お身体に気をつけて取り組まれてください、心から応援しています。
埼玉に住んでますが、毎年ねぶたの時期に帰省していて、子供達も楽しみにしていました。今年はとても残念ですが、いつかまた素晴らしいねぶた祭りが見られるように祈っています。応援しています！
今は大変なことばかりですが来年は綺麗なねぶた見ることを楽しみにしています。ねぶた師の皆さん、頑張ってください。
こういう企画が出来て嬉しいです！微力ながらも、何か出来ればと思ってました。来年こそはと、ねぶたを楽しみにしています(^^)
青森を盛り上げるため、頑張ってください！！
ねぶたが中止になって、市民として寂しく思っています。少しでも力になればと思います。
昨年から単身赴任で青森県にきました。ねぶたを観るのを楽しみにしています。今日のNHK ニュースで知りました。ねぶた師の皆様新型コロナに負けないで頑張ってください。応援しています。
今を乗り切って、来年のネブタ祭りに繋いで行きましょう!! 微力ですが、ご協力させていただきます。
ねぶたに関わる皆様、毎年沢山の感動をありがとうございます。微力ながら協力させていただきます。
夏にねぶた囃子が聞こえてくると心が騒ぎます。 今年は残念ながら、ねぶたとともに囃子を聞くことはできないけれど、こういうときだからこそ、青森のねぶた師の皆さんを応援します！
青森に単身赴任で来て4年少し経ちました。昨年は、家内と一緒に観ました。今年も一緒に観たいと言っていたので、コロナウィルスで中止となり残念に思っていたところ、本企画を知りました。家内に相談したところ、太っ腹で、お面を家に飾りたいとのことでした。

た。来年、楽しみにしています。頑張ってください。
皆様、来年も宜しく願い致します!菱友会囃子方はもちろん、ブルドッグもよろしくお願い致します^_^
毎年ねぶたで跳ねて、元気をもらって、また一年後を楽しみしていますが、今年は、今までの御礼として少しですが、支援させていただきました!来年のねぶたのために、パワーをためて、楽しみにしています! 頑張ってください!
以前桜の時期に旅行で訪れ、ねぶたのワ・ラッセで初めて山車を見ました。 何度かテレビで見たことがあったのですが生で見るねぶたの山車はとて大きく迫力があり、またデザインの繊細さに見入ってしまいました。 いつか生でねぶた祭りを見にいくのが夢です。 大変な時期かと思いますが、少しでも力になればと思います支援させていただきます。
私がとても感謝している方が笛吹きです。 そのねぶた愛を見ているので居ても立っても居られませんでした。 素晴らしい伝統工芸の維持を祈っています。
大好きなアニメの大好きなキャラクターが青森出身で祭りが大好きなことがきっかけで青森へちょくちょく足を運ぶようになりました。 いつか必ずねぶたを見に行きたいなーと考えていたので、また来年以降見に行けるように、少しではありますが応援させてください。 どうぞお体に気をつけて、がんばってください!
毎年楽しみにしていたねぶた祭り。 来年の開催に向けて頑張ってください。応援しています。 けっばれ!!!!
次の本祭を楽しみに生きていきます。ねぶた魂ここにあり。
来年のねぶた祭りを楽しみにしています! 製作活動がんばってください。
私は、昨年度青森公立大学を卒業した者です。大学時代の4年間、ねぶた祭りにはお世話になってました。大好きなねぶた祭りが今後も続いて欲しいと思い、少ないですが支援させていただきました。
またねぶたを見られる日を楽しみにしています。沢山の感動をいつもありがとうございます。応援しています!
青森にとってとても大切な文化です。 毎年楽しみにしております。 頑張ってください。

青森ねぶた祭りは私にとってかけがえのない存在です。少しでもねぶた師の皆様の支えになりたいと思っております。今まで、感動を届けてくれたねぶた師の皆様に感謝の想いを届ける場所ができ光栄です。ありがとうございます。これからもずっと応援します！
生まれた時から毎年参加しているねぶたがないのは、市民としてもとても寂しいことです。中止が決まった時から、ねぶた師さんに何かできることはないかと思っていました。先日、昨年のねぶたの映像をユーチューブで見ながら晩酌をしました。来年、最高の夏になるよう、楽しみにしています。
青森市出身の大学生です。現在埼玉に住んでいますが、ねぶたには毎年参加しています。今回の中止で大変だと思いますが、遠くから応援しています。
けっばれ！ねぶた！ けっばれ！青森！ 熱い思い！じゃわめぐ！ ◆青森の熱い思いを長年支えて来た【ねぶた祭り】 その火を決して途絶えさせてはいけないと思い、微力ながら支援させて頂きました。 この未曾有の事態に私自信も驚き生活も一変しました。一口では語れない思いもありますが青森に生まれ青森で育った私は、幼少期から、ねぶた祭りという歴史的文化の影響を受けて大人になりました。人の思いを沢山育んだ素晴らしい文化【ねぶた祭り】その歴史をこれからも支えて頂ければと心から思います。御自愛下さい。
ねぶたのない青森など考えられません。ねぶた師さん頑張って👊👊👊
今年は来年のねぶた祭りの為の充電期間と考え、一年頑張っていきましょう!!
けっばれ♥
今年は残念ながら中止ですが、来年のねぶた祭りを楽しみにしております。 大変な情勢ですが頑張って下さい。
大切な青森の文化を守るよう頑張っていきましょう！
私は青森市内の大学生です。このような時だからこそ、幼い頃から今までお世話になってきたねぶた祭りに少しでも恩返しできると良いと思い、今回支援させて頂きました。 決して、額は大きくないですが、ささやかながら力になれると幸いです。 また、コロナウイルスという災いが落ち着き、新たな日常が訪れた時、皆で笑いあって祭りを楽しむことができることを心から願っています。
毎年ねぶた祭りが開催されるのが当たり前だと思っていました。今、自分でも思っていなかったほどのショックを受けています。しかしそれと同時に、子どもの頃から慣れ親しんでいた「ねぶた」が自分にとってとても大切な存在だったのだと改めて感じてみえます。 ねぶた師の皆さん、来年のねぶた祭りをとても楽しみにしています！頑張ってください！
毎年楽しみにしてましたが今年は残念です。北村麻子さんの作品を楽しみにしてます。

日本人として生きて、大切にしたいものは何ですかと聞かれたら「青森ねぶたです」と答えたいです。世界に誇れるものを持っている私達は心から幸せ者だと思います。大きなねぶたが、来年笑い顔で登場してくれたら嬉しいです。応援しています。
今年はとても残念ですが、来年楽しみにしてます！ 頑張ってください👊！
もっと何かの形で応援できればと思います。
小さい頃からねぶたが大好きで息子も大ファンです！ 今は他県に住んでいますが、何かのお手伝いしたいです。 来年こそは盛大に盛り上げて欲しいです！ 頑張ってください！
故郷を離れて 40 年たちますが、心は今も変わらず津軽じょっぱり魂です ねぶた師の皆様、来年は素晴らしいねぶたを待っています
お会いした事はありませんが、これからもねぶたの文化、青森の重要な文化が繁栄されることを心から祈っております。大変な中だとは思いますが、少しでもお力になれば幸いです。応援させていただきます、頑張ってください！
ねぶたは青森県民の魂です。じゃわめぐ夏を待ってまーす！ ねぶた師の皆さん、頑張ってください！
わんつかですが・・・応援しています。
今年は大好きなねぶた祭りが中止になって、残念でなりません。 ねぶた師の方々には来年に向けて頑張ってくださいと心から思います。 微力ですが応援致します。頑張れ青森、頑張れねぶた師！！
ねぶたは日本の誇りであり、後世に残すべき宝です。 多くの人達が応援しているので、安心して取り組んで下さい。
ねぶたと青森が大好きです！ 今年はとても残念ですが、ずっとねぶたが続いて行くように、応援しています (^-^)
青森と言えばねぶた、ねぶたと言えば青森、その代名詞であるお祭りが開催されないのはとても残念です。東北夏祭りのリーダーと言われるまで大きくなりました。子供のころねぶた祭りを見たあとは鈴を拾って楽しんだり、友達と出店へ行ったことが思い出されます。8月7日は、合浦公園の砂浜に行って花火大会を親子でよかったねと言いながら家路についたものです。昨今の事情で中止は致し方ありませんが、その分来年に向けてパワーを蓄え素晴らしいねぶたを作ってくださいよう心よりお願い申し上げます。
青森公立大学地域みらい学科の学生です。佐々木先生のゼミの友達からこの活動を知り、支援しました。少ない金額ですが、お役に立てれば幸いです。これからも、多くの人々に笑顔と希望を届けてくれた、伝統のある、ねぶた祭の活動頑張ってください！応援しています

ねぶた中止が発表された時、最初に頭に浮かんだのはねぶた師の皆さんのことでした。だからこんなプロジェクトを待っていました！ありがとうございます。 ねぶた師は青森の宝です。なんとかこの一年をしのいで、来年また私たちを唸らせるような素晴らしいねぶたを見せて欲しい。応援しています。見るのも跳ねるのも楽しみにしています！
僕は2才ですが、ねぶたが大大大好きです。ねぶたを見ることができなくて、とてもとても悲しいです。ワラッセで紙はりもやったし、お囃子の太鼓もたたけます。ねぶたと一緒に、はねとと一緒にまた太鼓をたたきたいです。ねぶたを作るお兄さんたち頑張ってください。ねぶたをまたつくってね。約束だよ。
ねぶたを守る。そのためにはねぶた師の生活を守る。みなさんの頑張りがいつか実を結び、来年や再来年もこれからもずっとその伝統が途切れることがないようみんなを笑顔に、みなさんで頑張っていきましょう!!
ねぶた祭の伝統が続いていくことを祈っています。応援しています。
毎年跳人として参加させていただいております。今年は、息子が中学3年の夏で、受験に向き合いながらも楽しみにしていたねぶたでしたが、残念なことになってしまいました。そんな息子に、ねぶた師さんを元気付けるプロジェクトがあるんだって♪と伝えたら、「僕のおこづかいで元気になってほしい」と。微力ながら参加させていただきました。ねぶた師さんあつての祭です。 来年は、当たり前前のねぶたではない、市民が立ち上がった今までに感じたことのないねぶたになることを期待して、エールを送りたいです。頑張れ～！
ねぶた大好きです。これからもずっと。
今年見に行く予定だったので、気持ちだけでも青森に飛ばせればと思い支援しました！来年以降、また迫力あるねぶたを見せてください！
青森県出身者として応援したいです！がんばれ！
次回のねぶた祭の時にはみんなが笑顔だといいですね。
毎年家族でねぶたに参加しています。来年、ねぶた祭りができるよう、祈っています。ねぶたに関わる皆さん、頑張ってください。応援しています。
子供の頃からずっとねぶたにハネトとして参加してました。応援してます！！頑張ってください！
ねぶた師の皆さん、大変でしょうけど、踏ん張ってください。青森市民のため、ねぶたを愛する県民、国民、世界のため、そして郷土を愛し未来の宝でもある子供達のために頑張ってください。
来年のねぶた祭楽しみにしてます！今年はつらいことも多いと思いますが、応援してます。

ねぶた師のみなさん、来年はこれまで以上に迫力のある作品でぜひ盛り上げてください ね！青森の歴史あるお祭りが中止になったこと、離れた地から大変悲しく思っております。 帰省もできずにいますが、少しでも青森県の力になりたいと思い、今回申し込ませて いただきました。けっばっていきましょう!!
現在は東京在住ですが、私も子どもたちも、ねぶたに参加するためにほとんど毎年ねぶた 期間に帰省しています。 私は長年楽しみにしているねぶた師さんがいますが、ここ数年、若いねぶた師さんたちの 作品も、とても素敵ですね。 来年はねぶたをみんなが満喫できるように祈ってます！
今年、約 20 年ぶりにねぶた祭りに行く予定でしたが、中止になってしまって本当に残念 です。少ししか支援できませんが、来年必ず行きますので、コロナに負けずに一緒に頑張 りましょう！
青森県出身です。今年はねぶた祭りに行きたかったのが残念ですが来年に向けて、微力な がら応援させていただきます！
現在は東京在住ですが、ねぶたのお囃子を聞くと、わくわくします。ねぶた祭を継承する 素晴らしい仕事をコロナに負けずに続けていただきたいです^^応援しています♪
ねぶたは世界に誇れる文化です。応援しています。
生まれ故郷の思い出、ねぶた祭り。家族で毎年見に行きました。 県外在住ですが、少しでもお役に立てたらと参加しました。これからも応援しています。
青森といえばねぶた。夏が近づくと体がウズウズ。今年は我慢我慢。来年はっちゃけま す。皆さん大変ですが一致団結で頑張りましょう。
私も今年、青森に帰れるか不安ですが。。 また、いつもどおり青森の夏の風景が戻る日をみなさんとともに待ちながら応援してい ます！
何らかの方法で少しでも支援出来ればと思っていました。ねぶた師はねぶた馬鹿でなけ れば出来ない仕事と理解しています。ねぶた開催時も生活ギリギリの中ねぶたに掛ける 心意気は本当に感謝しています。少ない金額ですがご活用して頂ければ助かります。コロ ナウィルスの終息と来年の盛大なねぶたを今から夢見て私たちも頑張ります。皆でこの 難局を乗り越えましょう。
ねぶた祭のない青森の夏はさびしすぎます…。前夜祭から花火大会まで全部ナシの 8 月 を考えただけで涙が出そうです。来年までおあずけですが何とか我慢しますので、ねぶた 師のみなさんもうかがこの 1 年を踏ん張ってください。来年は毎日ねぶたを見たいです！ 応援しています！！
コロナに負けるな！来年の夏、思いっきり盛り上がりましょう！
伝統の火を消すな!の思いを形にできてプロジェクト立案者に感謝します。

暑い夏を彩るはずだった『ねぶた祭り』が、このままでは、淋し過ぎます!! 今年は叶わないですが、来年は、今年の分も熱く楽しめるように、若干ではありますが応援できればと思います。
青森県出身です！東京在住ですが、いつも応援してます！けっばれ！！
お囃子やってます。今年は残念ですが来年みんなではじめましょう。
来年のねぶたは、たんだでねーごとになりそうだな！（笑）楽しみだー きっと来年も暑い夏はくるよねー ねぶた師のみなさん のりそり かっこいい ねぶたっこ お願いします！
ねぶたの無い夏は考えられない。みんなの願いが叶いますように。皆さん、頑張って乗りきりましょう。
毎年、子ども達が障害福祉ねぶたに参加させて頂いています。今年はとても残念ですが、次年度に向けて頑張って下さい。多種多様の障害を持つ子供達も楽しみにしています
来年ますますパワーアップしたねぶた祭り、楽しみにしています！！思う存分跳ねます！コロナに負けず頑張って下さい！
青森出身で現在は埼玉県在住です。ねぶたの時期が近づくと離れていてもワクワクしてきます！来年はねぶた祭り開催できますよう祈っています。この1年頑張って下さい！
青森を離れて8年。今年こそ観に行こうと思っていた矢先でした。来年は絶対に行きます！。 遠く静岡県より微力ながら応援させていただきます。
ねぶた祭りは世界に誇れるお祭りです。来年、倍楽しみたいと思います。一緒に歩みましょう。
ねぶた師の皆さん、支援に携わる皆さん、頑張ってこのコロナ禍を乗り切りましょう！来年良いねぶたに出会えることを期待しています！
毎年ねぶた祭りを楽しみに生きてます！来年以降また素敵なねぶたを制作していただけるの心待ちにしております！
世界に誇れる青森の宝を守る為に、微力ながら協力致します。 これからも様々な所にねぶたが参上するのを楽しみにしております！
ねぶた祭り、毎年楽しく参加させて頂いております。ねぶたのない夏は、ねぶたを愛する日本中の方に、その良さを思い出して頂く夏にしましょう！陰ながら、僅かな金額ですがご支援させて頂きます。また来年、今年の分まで楽しみが増えたと思い、さらに愛されるねぶた祭りになる事をお祈り申し上げます。
ねぶた祭り、物心つく前から毎年跳人として参加しています。ねぶた祭りが無い青森の夏なんて考えられません。でも今は我慢して、来年のねぶた祭りを待っています。ねぶた師の皆様、本当に大変な状況だと思いますが、少しでも支えになれば嬉しいです。

青森県に家族が赴任していた当時、初めてねぶた祭りに行きました。 日本一のお祭りですし、世界に誇れる日本の芸術です。ここをなんとか乗り切ってください。東京から応援しています。
ねぶたは日本の宝。みんなの力でねぶたを守ろう。
毎年家族でねぶたを楽しんでいます。来年の開催を楽しみに、ほんの少しですが支援の気持ちを送らせていただきました。活動を応援しております。
去年まで青森に住んでいましたが、ねぶたが大好きでした！毎年 8 月が楽しみで仕方なかったです！コロナが落ち着いたらまた絶対参加したいです！ コロナに負けず頑張ってください！！
ねぶたの文化を絶やさないようにしましょう！ねぶた師の皆さん、このプロジェクトの皆さん、応援しております！頑張ってください。
ねぶた師の方々がこれからもまた素晴らしいねぶたを作り上げていけることを願い、微力ながら応援しております。また活気あるねぶた祭りが続いていくことにつながれば幸いです。
青森市出身で、毎年ねぶたに参加しています。 今年も楽しみにしていたのですが、中止になりとても残念です。 いつも感動をくださっているねぶた師の皆さま、ねぶた祭りを応援しています！ 関係者の皆さま、今年の分は来年へぶつけて、今はゆっくり休んでください。 微力ながら、支援させていただきます。 コロナに負けるな！けっばねぶた！
一昨年まで青森に居てねぶた祭り大好きです。今年は残念ですが、また来年出来るように応援してます。また跳ねて囃してやりたいです！楽しみにしてます。

2020年5月28日 風薫る季節、蒼天の夜空に、已むを得ない想いを浮かべ、順風満帆に行かずとも、代打の我々がねぶたを灯します。きっとまた会えるその時まで

母の実家が青森市内でした、小さい頃から母の実家に帰省し、お婆ちゃん、お爺ちゃんと手を繋ぎ、育児から解放された母の笑顔、私を見守るような心配な顔をする姉を横目に、いつ来るのかなあいつ来るのかなあと、じっとしていられず待っていた記憶があります。今と違い先頭のねぶたが中々現れず、でも、遠くから聞こえ始めるねぶた囃子に心が躍り、それが身体に染み込み、小さいながらカッコいいなあ、ねぶたって凄いなあと、、、気付けば目的は鈴をもらう事、拾う事になっていた様な、、(苦笑)。あれから何十年経っても、あのねぶた囃子を聴くと身体の下から震える様な感動を覚えます。改めて、この様な私をねぶた好きにしてくれた、ねぶた師の皆様各団体の方々、ねぶたに関わる全ての方々、ねぶたを生み出してくれた青森の地に感謝申し上げます。本当にありがとうございます今回コロナウィルスという殆どの人が経験した事のない出来事、我々の大切な物を呆気なく奪って行く様に恐怖を覚えました、これは決してねぶた祭りだけではありません。しかしねぶた祭りが好きで、毎年楽しみにしておりました。中止は仕方ない、諦めながらも心の何処かでもがいていたのかもしれない、率直な感想でした。とても素晴らしい活動で自分もねぶたに関わる事が出来たんだと嬉しく思います。

長くなりましたが、ねぶた祭りに関わる全てのスタッフ皆様へ！！
ねぶた祭りはコロナには負けません！！心の底から応援しております！！それ！！けっばれ！！！！

関東より愛を込めて

愛媛にお嫁に来て20年。自称青森観光大使として松山市で青森をいつも応援しています
♥ 津軽魂を思い起こしてくれるねぶた祭り★来年は盛大にやって世界中を元気にしてくれる事を 心から願っております。けっばれ！青森♥

新しい時代の幕開けだと思います。それにふさわしいねぶた制作に頑張っていたきたいので参加しました。

青森市出身です。今年もねぶたの時期に帰省することを楽しみにしていたので、中止を知ってとても残念な思いでいました。こんな素敵なプロジェクトを立ち上げてくださってありがとうございます。

ねぶたは、人生の励みになります。頑張ってください。

ねぶた祭りの中止は残念ですが、また来年盛り上がりましょう。ねぶた師の皆さん、頑張りましょう。

夏が近づく度に毎年ウキウキな気持ちにさせてくれるねぶた祭り。どんな障害にも負けない強さを持っていると信じています。みんなが笑顔で祭りを迎えられるまで応援しています！頑張ってください！！

ねぶたが大好きです！青森人にとって、ねぶたの季節は、遠く離れていても心踊る季節です。今年はこのような状況下、仕方ないですが。来年に期待しています！心から応援しています！
昨年まで 5 年連続で青森ねぶた祭で跳人をやりました。家族や友人達と一緒に跳ねましたが、とても楽しく子供達もまた行きたいと言っています。 今年は残念ですが、来年ねぶた祭が復活することを願って支援しました。
スタッフとしてねぶた制作に携わっております。今回の支援誠にありがとうございます！ねぶたがないと生きていけない！そんな人がたくさんいます。僕もその一人です。この支援はそんな人々の救いとなることでしょう。
ねぶた祭が毎年の楽しみでした。今後も続けられるようにがんばってください。
今年は、毎年見ていたねぶたが開催されずとても残念です。 ねぶた師の方々が誰よりも落胆されていると思いますし、大変な思いもされていらっしゃると思います。来年こそは開催されることを心より願っています。
毎年のねぶたが楽しみです。来年、お邪魔できるのを心待ちにしています。
神奈川県在住ですが、夏休みにねぶた祭りに参加することが私の毎年の楽しみです。今年はコロナウイルスの影響で残念な結果になりましたが、また来年素晴らしいねぶたを見れることを楽しみにしています！けっばれ！
実家のある青森市をいつも応援してます。ねぶた囃子を聞くと鳥肌と共に涙が出てきます。けっばれ"ねぶた"!!
青森より離れて暮らしていますがねぶた祭りはテレビで楽しみにしていました。熊本の地震復興支援でねぶたを始めてみた熊本市民は涙して見ている人もいました。来年は青森に帰りねぶたをみたいと思います。
ねぶたのない青森の夏はとても寂しいですが、次の祭り開催時は今年の寂しさをバネに今までにないくらい盛り上がると思います。楽しみです！ ねぶた師支援プロジェクトを発起してくれた青森公立大学の皆様、有志の皆様ありがとうございます！
必ず訪れる熱いねぶたの夏を楽しみにしています！
微力ながら協力させていただきます。世界に誇れる青森ねぶた祭りを守りたい、その一心だけです。ねぶた師や関係者の皆さん、負けずに頑張りましょう。
囃子方として、ねぶた師の方々に少しの支えでも思いました。祭復活まで皆で頑張りましょう！
毎年楽しみにしていますが、今年は残念です。これからも頑張ってください。応援してます。
伝統を守り、繋ぐことは、本当に大変なことと思いますが、応援しています！
昔からねぶたが好きなので微力ながら応援します。是非頑張ってください。

苦しみは、いつまでも続かない！絶対ねぶた祭りは、復活！します。
ねぶた祭り、ここ数年テレビ中継で見えておりますが、また生で見られる日を楽しみに頑張ります。お体に気を付けてくださいね。応援しています！
今年はとても残念でありませんが、この気持ちを来年爆発させましょう！
昨年、ワラッセで先生方のねぶたを見て感動しました。 力強さだけでなく繊細さや、美しさ、優しさ、悲しさなど様々な表情があり引き込まれました。自分にできることは小さなことですが、このプロジェクトに協力できて本当に嬉しいです！また大作が見れる日を楽しみししています。
青森県に生まれ育ち、45年経ちます。 お恥ずかしながら、未だ『ねぶた』を観に行けず、子供達も巣立ち今年こそは観に行くことにしていました。今年、三回忌の亡き義父は生前よく『ねぶた』の話をしていました。亡き義父の供養のためにも必ず観に行きます!! TVでしか観た事はありませんが、毎年、『元気』と『勇氣』と『生きる躍動』を与えてくれて、ありがとうございます!!
毎年ワクワクしながら待っている『ねぶた』。ねぶたは青森の誇りです!! みんなが楽しみにしています。来年へ向け応援してます。 ケッパレ!!!!!!
青森の夏を必ず復活させてください。一人も欠けることがありませんように...
伝統は大事に、次の時代に繋げて行きましょう
毎年楽しみにしています。 今回のプロジェクトを知り、1青森市民として僅かでも支援させていただきます。コロナなんぞに青森の伝統を潰されてたまるものか!!
愛知県在住ですが、毎年ねぶた祭りに参加しております。 大学生の頃にねぶた祭りに出会ってから、夏は青森に旅行へ行くことが恒例になりました。今年はねぶたの姿が見られず残念ですが、また来年、あの感動を味わえることを楽しみにしております。少しでも今まで頂いた感動のお礼ができればとの思いで、協力させて頂きます。応援しています。
大好きなねぶたが今年ないだなんて、未だに嘘のようです。私の僅かな支援ではありますが、ねぶた師のみなさん、来年、今年やれなかった思いを爆発してください。迫力のある、勇ましいねぶた、期待してます。
大好きな地元の大好きなお祭り、ずっとずっと続いていきますように。
少しの支援しかできませんが、この難局を乗り越えて、青森を盛り上げていきましょう！
止まない雨はなし。 頑張らしましょう！

夏夜空に響け！青森のねぶた囃子！
継続は力です。青森ねぶたの伝統を守り続けましょう。ともに頑張りましょう。
ねぶた師の先生方には、例年と違うスケジュールに、お身体の調子もご心配申し上げております。どうか来年に向けてお大切になさって下さいませ。 そして、てる先生、この度は代表発起人ありがとうございます。 これからも、いろんな形で皆で青森ねぶたを応援して参りましょう！(^^)
大好きなねぶたがずっとずっと続きますように！ 少しですが支援させていただきます。このような機会を設けてくださりありがとうございます。
毎年 同じ場所でねぶたを見てます。 来年は今年の分も楽しみにしてます。 顔晴れ（がんばれ）！
ねぶた師の方々今年は、大変だと思いますが、来年を楽しみに 応援しています。
時節柄といい、ねぶた祭り関係者特にねぶた師の皆様におかれては活動が制限され残念な事と存じます。日本の火祭りを継続出来る様に応援しております。
青森ねぶたが復活することを願います。今までもこれからも繋がってます。
毎年、関西から帰省する姉家族とねぶたを見に行っていました。今年は帰省も無理です。皆が大変だと思いますが、来年はまた姉家族と一緒にねぶたが見たいと思います。
毎年、感動を有り難うございます。また参加出来る日を、楽しみにしています。
昨年ねぶた祭りを見て感動しました。微力ながら応援しています。
八戸市民ですが、ねぶた祭りは何度見ても感動します。特に、お囃子の人の表情が好きです。皆さん、頑張ってください。
林広海氏の新作ねぶたを見たかったので残念です。来年以降も期待してます！
今、放送中のハッピーを観て参加しました。立ち上げてくださってありがとうございます。お陰様でねぶたへの想いをカタチに出来て嬉しいです。ありがとうございました。
本当にわずかですが、応援させていただきます。甥が青森の大学に今年入学。ねぶたも出している学校なので、本人以上に家族が観に行くのを楽しみにしてました。来年こそはと願います。このプロジェクトを立ち上げていただき、何かできないかとモヤモヤしていたのが、少し軽くなりました。本当に感謝です。
来年こそねぶた祭が開催されるように応援しています！
世界に誇る青森のねぶたが、もっともっと、素晴らしいものになるように応援してます。ねぶた師のみなさん、コロナを乗り越えて来年に向けて頑張ってください！

ねぶたの青森で生活していて今年の中止の発表はとても寂しく思っていました少しですが支援させていただきます
青森市在住の者です。青森が全国、全世界に誇るねぶたを守るため、ほんのお気持ちですが寄付に参加させて頂きました。ねぶたの作り手の皆さんが、これからも素晴らしいねぶたを作って頂けるよう、心よりお祈り申し上げます。
生まれも育ちも青森市です。今は地元を離れましたが、今でも囃子を聞くと胸がじゃわめいでしまいます。守ろう青森ねぶた！応援してます！！
青森出身者として支えないわけにはいきませんね。 知り合いの絵師も居るので細やかですが支援させていただきます。
10歳の頃に観たねぶたが忘れられず、21歳で再び観てやはりこのお祭りが大好きだと思いました。青森は少し遠いのですが本当は毎年観に行きたいぐらいです。あの迫力と繊細さの共存、圧倒されます。新型コロナ禍が明け、出来れば来年には観に行きたいです。応援しています！
幼少期からねぶたの造形を見るのが大好きでした。来年ねぶたの製作が再開できることを心から祈っています。
遠く離れた愛知県から少しでも地元のチカラになればと応援します！ケッパレ！！
ねぶた祭り毎年楽しみにしています。青森の誇りであるねぶたを守り続けてください。
今年は残念ですが、来年を楽しみにしています。頑張ってください。
祭りの有無に関わらず、ぜひ創作活動を続けてください。
東京にいながねぶた祭りに何かできることはないかと考えていた矢先にこのプロジェクトをみかけて微力ながら支援できる機会があり大変嬉しく思います。今年は実施ができず残念ではありますが来年こそ実現できるように応援しております！そして沢山の仲間をつれて参加しに行きます！
公立大学卒業生です。ねぶた祭りの熱気は忘れる事はありません。頑張ってください！
父と母がねぶた祭りを楽しみにしています。コロナに負けず頑張ってください。応援しています。
青森に13年間、住んでいました。県外出身の私にとって、街をあげての祭りがある青森に感動しました。青森の誇りです！宝です！青森を離れてからも毎年、観に行っています。素晴らしい祭りをこれからも守り続けて欲しいです。ずっとずっと応援しています！
頑張ろう！！青森市 ねぶた師のみなさんを応援します。
I♥ ねぶた I♥ 故郷
来年は盛り上がりましょう！

1年で1番楽しみにしている行事、青森ねぶた祭が中止でとても残念ですが、その分来年とてつもないパワーで開催されることを願っています。 応援しています。頑張ってください！！
今年は、新型コロナウイルスの影響でねぶた祭りが中止になり、他業種含め経済的にも大きなダメージを受けていると思います。 共に協力し合い頑張るためにも、少額ですが支援させていただきます。応援しています。
青森に在勤していた3年間、毎年、1週間の期間中、感動と生きる力をいただきました。ほんとうにありがとうございました！ねぶた師の皆さん、つくるみなさん、祭りを実行されるみなさんにほんとうに頭が下がりますし、感謝です。今は転勤しましたが、また、いつか、必ずねぶた祭を見に行きます！頑張ってください！
青森ねぶたが永遠に受け継がれていけるように皆さんで支えましょう！
毎年うちの子どもたちが囃子方や跳人で出ています。 来年また大好きなねぶたに参加するのを楽しみに、今年はねぶた師やねぶたに関わるすべての方々を応援いたします！
本来なら今年のねぶたに義両親と参加予定でした。来年以降に参加リベンジしたいです。 頑張ってください。
生まれも育ちも青森です。これからもねぶた祭りに参加できることを楽しみにしています！頑張ってください！
小学生の頃は通学路から毎日ねぶた作りを眺めていました！ 来年はそのTシャツ来てねぶたに挑みます。頑張ってください！
今までの、そしてこれからのほんの1年ですが、伝統文化を続ける為に微力ながら応援します！
今年産まれたこどもを連れてねぶた祭りに参加するのを楽しみにしています！！
青森中が一つになり、県外、外国の方とも繋がれるねぶた祭りが青森市民の誇りです。ねぶた祭りが寂しさは消せませんがその分、みんなが元気で健康でいられるならそれが1番だと思います。ねぶた師の皆さんもお元気でまた来年に向けて頑張ってください！
みんなで前を向いて、一緒に乗りきっていきましょう！！ねぶたも青森も東北も、大好きです。また素敵な景色や美味しい食べ物、そこに住んでいる皆さんに会いに行きます！
来年こそ、最高のねぶた祭りとなるよう、がんばりましょう。「ねぶた馬鹿」みんなが応援しています。
毎年ねぶた祭り楽しませて頂いています。今年は本当に残念でなりません。皆で応援頑張りましょう！
ねぶた祭は見に行ったことは残念ながら一度もありません。写真で見たことがあったり、訪ねた方のお話を伺ったことはあります。いつか社員皆で見に行ける日がくると素敵だなと思います。匠の技をどうか継承できるよう頑張ってください。

世界にほこれるねぶたのさらなる発展、進化を応援いたします！
ねぶたは青森の、否、日本の夏の祭りの象徴だと思ってます。ねぶた祭りを支え、作り続けてくださってる方々がこれからも最高の夏を過ごせます様に！
約 30 年前、青森市出身の友人に連れられて宮城県から参加して以来、ずっと大好きな青森ねぶた。転勤で青森市に住んだ 3 年間は本当に楽しかったです。来年最高のねぶたを見せていただくためにも、微力ですが応援します！
ねぶた中止は残念です。中止になって大切な祭、地元の祭と再認識しました。来年期待します。
ねぶた祭りを毎年楽しみに、関東でおしごと頑張っています。今年はこんな状況になってしまい、とても残念ですが、ねぶた文化は絶対無くしてはいけないと思います！！これからもずっとずっと応援します！大変な状況ですが、乗り換えて、来年はねぶたを見よう、楽しみにしています♥
青森市出身で浜松市在住者です。地元に住居したときは毎年跳ねてました。とても残念に思っております。少しでもお役に立てればと思い賛同致します。
辛抱の年を乗り越えてまた最高の熱いねぶた祭を待ってます！
ねぶた大好きです！ねぶた師の方、プロジェクトメンバーの方、微力ながら応援してます！
ねぶたは青森市民の誇りです!!これからのねぶたのために少しですが協力させてください(^^)来年楽しみにしてます!!
自分の脚で歩けるようになってから毎年参加してます。復活を心待ちにしています。 NO NEBUTA,!!NO LIFE!!
大変な時期ですが、頑張って下さい！！ 2021 年の夏こそ、跳ねれる事を楽しみにしてます！^_^
普通に参加したらこれ以上は使ってるでしょ、って事で。 今年は囃子やりに行く予定だったし。ま、来年やりましょかーwww
毎年楽しみしているねぶた祭りが中止になり残念ですが、来年はいつも以上に素晴らしいねぶたを期待しています^_^来年のねぶた祭りまで待ち遠しいです(^v^)
ねぶたが無いってのが信じられないです。少しでも支援になればと思います。 乗り越えましょう！来年は派手にいきましょう！
青森に嫁いで初めて生でねぶた祭りを観覧した時の、あの、なんとも言えない感動、今でも忘れません。青森出身の主人から「じゃわめぐ」と言う津軽弁を教えてくださいました。私はこの表現は標準語に訳すことは出来ないと思ってます。以来 20 年、祭りに跳人参加させて頂いた感謝と今後の発展をお祈りしています。
茨城の地から、応援しています。頑張って下さい。

2021年度 地域連携センタープロジェクト事業

成果報告書

灯籠文化圏比較研究

～「眠流し」行事と「山・鉾・屋台」行事から～

発行日 2022年3月

発行所 青森公立大学 経営経済学部

地域みらい学科 佐々木研究室

〒030-0196 青森市大字合子沢字山崎153-4

T E L 017-764-1570

印 刷 アクセス二十一出版有限公司